

# パーリ上座部における「小部」の成立と受容

——結集と隠没の伝承を巡って——

清水俊史

## 問題の所在

(a) 先行研究の総括

(b) 本研究の目的

## 第一章 結集伝承と隠没伝承における小部

第一節 結集伝承における「大地の震動」

第二節 隠没伝承における小部の痕跡

第一項 隠没伝承( $\alpha$ )

第二項 隠没伝承( $\beta$ )

第三項 隠没伝承( $\gamma$ )

(a) ジャータカ誦者

(b) 偈頌の隠没

第四項 隠没伝承のまとめ

## 結論

## 第二章 小部の成立と受容

第一節 小部成立の五段階説に関する問題点

第一項 段階(A)(B)における隠没伝承

第二項 段階(C)における「四大教法註」

第三項 段階(D)における「第一結集伝承」

第四項 まとめ

第二節 小部とブッダゴーサ

第一項 四部から五部への再編纂の時期

第二項 狭義と広義の小部

第三項 ブッダゴーサによる「仏語の分類」

第三節 ブッダゴーサ以後における小部

第一項 十四書と十五書

第二項 「四大教法註」に対するダンマパーラ復註

第三項 上座部における小部の受容

## 結論

## 総括

## 問題の所在

本稿は、ブッダゴーサ及びダンマパーラによる註釈文献を研究の材料としながら、上座部における「小部」の成立と受容について考察する。この「小部」(Khuddaka-nikāya)とは、「長」「中」「相応」「増支」と呼ばれる四つの集成(阿含:Āgama、または、部:Nikāya)から漏れた雑余の典籍を収載した經典集として知られる。上座部以外の諸部派も、これと同様の「雑(小)蔵/阿含」(Kṣudraka-piṭaka/-āgama)と呼ばれる集成を保持していたことが明らかとなっているが、現在まで完全な形として残っているものは、上座部において経蔵の第五部として伝持されてきた「小部」だけである<sup>1)</sup>。

この上座部に伝わる「小部」のうちには、『スッタニパータ』『ダンマパダ』といった汎仏教的な古い韻文經典だけでなく、上座部のみに伝わる『チャリヤーピタカ』『ブッダヴァンサ』などの成立の新しい資料をはじめ、阿毘達磨的内容を持つ『無礙解道』といった教理書に至るまで、新古様々な聖典が収載されている。このような多様性を持つ「小部」の成立過程は、上座部の三蔵形成史を解明する糸口として古くから注目を集めてきた。そこでまず先行研究における成果を総括し、そこから本研究の目的を探りたい。

### (a) 先行研究の総括

上座部における「小部」の成立事情を巡っては、前田惠學[別1(= 1964): pp. 681-787]を一つの到達点として、これまでに数多くの研究が積み重ねら

---

1) 諸部派の結集伝承における雑蔵相当經の扱いについては塚本啓祥[1980(= 1966): pp. 182-192]を参照。また、上座部が保持している小部については、前田惠學[別1(= 1964): pp. 681-787]、森祖道[1984: pp. 274-282]、馬場紀寿[2008: pp. 155-253]などの指摘によって、四部から漏れた雑余の經典を収載した補助的な文献群であることが知られる。そして、前田惠學[別1(= 1964): pp. 681.4-686.14]、本庄良文[2014 i: pp. 32.1-33.1]などの諸研究によって、説一切有部においても、三蔵の外側に「小(雑)蔵」(Kṣudraka-piṭaka)を、もしくは四阿含の外側に「小(雑)阿含」(Kṣudraka-āgama)を保持していたことが徐々に明らかになっている。

れてきている<sup>2)</sup>。それら諸研究によって、1)「小部」という範疇の成立と、そこに収載されるテキストの成立とは別々に考察されるべきであること、2)「小部」という範疇が三蔵内に加えられたのも、そこに収載される典籍の構成内容が現在の形に整備されたのも、他の四部と比べて遅れることが明らかとなっている。このように上座部において「小部」の成立が遅れた原因として、小部を構成する諸経が主として韻文資料であることが注目されている<sup>3)</sup>。M. Winternitz は、詩的作品が流行することで正法が廃れてしまうことを危惧する初期經典の記述から<sup>4)</sup>、当初の仏教教団では詩的作品には聖典としての権威が

2) 宇井伯寿 [2: pp. 140-150]、平川彰 [9: pp. 7-30] (= [1960: pp. 5-28])、前田惠學 [別1 (= 1964): pp. 681-787]、Rhys Davids, T.W. [1903: pp. 161-188] (和訳: リス・デヴィス (中村了昭 訳) [1984: pp. 114-134])、Winternitz, M. [1908-1920 ii: pp. 60.6-61.13] (和訳: ヴィンテルニッツ (中野義照 訳) [1964-1978 iii: p. 61.1-17])、Law, B.C. [1933 i: pp. 1-42] (= [2000: pp. 29-66])、Lamotte, É. [1956] [1958: pp. 171-178]、Lamotte, É. (Webb-Boin, S. tr.) [1988a: pp. 156-163]、Norman, K.R. [1997: pp. 131-148]、Hinüber [1996: §84-85]などを参照。

3) 渡辺文麿 [1979]、馬場紀寿 [2010]

4) SN. 20, 7 (Vol. II pp. 266.25-267.25):

Sāvatthiyaṃ viharati. “bhūtapubbaṃ, bhikkhave, dasārahānaṃ ānako nāma mudiṅgo ahoṣi. Tassa dasārahā ānake ghaṭṭe aññaṃ āpiṃ odahiṃsu. Ahu kho so, bhikkhave, samayo yaṃ ānakassa mudiṅgassa porāṇaṃ pokkharaphalakamaṃ antaradhāyī, ānisaṅghāto va avasissi. Evam eva kho, bhikkhave, bhavissanti bhikkhū anāgataṃ addhānaṃ, ye te suttantā tathāgatabhāsītā gambhīrā gambhīratthā lokuttarā suññatapaṭisaṃyuttā, tesu bhaññaṃānesu na sussusisanti<sup>(1)</sup> na soṭaṃ odahissanti na añña cittaṃ upaṭṭhāpessanti na ca te dhamme uggaḥetabbaṃ pariyāpūṇitabbaṃ maññissanti. Ye pana te suttantā kavikatā kāveyyā cittakkharā cittavyañjanā bahirakā sāvakabhāsītā, tesu bhaññaṃānesu sussusisanti, soṭaṃ odahissanti, añña cittaṃ upaṭṭhāpessanti, te<sup>(2)</sup> dhamme uggaḥetabbaṃ pariyāpūṇitabbaṃ maññissanti. Evam eva tesam<sup>(3)</sup>, bhikkhave, suttantānaṃ tathāgatabhāsītānaṃ gambhīrānaṃ gambhīratthānaṃ lokuttarānaṃ suññatapaṭisaṃyuttānaṃ<sup>(4)</sup> antaradhānaṃ bhavissati. Tasmātiha, bhikkhave, evaṃ sikkhitabbaṃ - ye te suttantā tathāgatabhāsītā gambhīrā gambhīratthā lokuttarā suññatapaṭisaṃyuttā<sup>(5)</sup>, tesu bhaññaṃānesu sussusisāma, soṭaṃ odahissāma, añña cittaṃ upaṭṭhāpessāma, te ca dhamme uggaḥetabbaṃ pariyāpūṇitabbaṃ maññissāma ti. Evam hi vo, bhikkhave, sikkhitabbaṃ” ti. [ある時、世尊は] サーヴァッティに滞在していた。[その時、世尊は説いた。]「比丘らよ、その昔、ダサーラハ族にはアーナカという名前の小鼓がありました。アーナカが組み立てられたとき、ダサーラハ族はそれに別の楔を打ち込みました。比丘らよ、アーナカ小鼓の古い張皮が消えたとき、楔の集まりだけが残りました。比丘らよ、まさに同様に、未来世において比丘たちは、深遠で、深い意義をもち、出世間の、空性に結ばれた如来所説の経が語られても、彼らはよく聞かず、耳を傾けず、知ろうと心を起こさず、それらの法を学び取り了知しようとは思わないでしょう。しかし、詩人

十分には認められておらず、それらが「小部」として上座部に受容されたのは時代が下ってからであると指摘している<sup>5)</sup>。この指摘は、各部派が保持する「小(雑)蔵/阿含/部」のうち部派を超えて共通している典籍が主として詩的作品であることや<sup>6)</sup>、諸部派の律蔵において仏陀の教えを韻文化することが禁じられていることから裏付けられる<sup>7)</sup>。

によってつくられ、詩歌のかたちをとり、様々な文字と様々な表現をもつ、〔教えの〕外にある声聞所説の経が語られれば、彼らはよく聞き、耳を傾け、知ろうと心を起こし、それらの法を学び取り了知しようと思うでしょう。比丘らよ、このようにこれら深遠で、深い意義をもち、出世間の、空性に結ばれた如来所説の経は隠没するでしょう。比丘らよ、従ってここで次のように学ばれるべきです。“比丘たちは、深遠で、深い意義をもち、出世間の、空性に結ばれた如来所説の経が語られたならば、彼らはよく聞き、耳を傾け、知ろうと心を起こし、それらの法を学び取り了知しようと思ひなさい”と。比丘らよ、このようにあなた達は学ぶべきです”と。

- (1) PTS: *sussūssanti*, VRI: *sussūssanti* (always)
- (2) PTS: *omit*, VRI: *add ca*
- (3) PTS: *eva tesam*, VRI: *etesam*
- (4) PTS: *-paṭisaññuttāṇaṃ*, VRI: *-paṭisaṃyuttāṇaṃ*
- (5) PTS: *-paṭisaññuttā*, VRI: *-paṭisaṃyuttā*

対応漢訳『雑阿含』巻47、第1058経 (T02. 345b12) においては「文辭綺飾。世俗雜句」とある。なお、この相応部經典と同趣旨は、AN. ii, 5, 6 (Vol. I pp. 72.24-73.23)、AN. v, 79 (Vol. III p. 107.11-24) においても説かれる。

- 5) Winternitz, M. [1908-1920 ii: pp. 60.6-61.13] を参照 (和訳: ヴィンテルニッツ (中野義照 訳) [1964-1978 iii: p. 61.1-17] も参照)。J. Filliozat も、文学風や詩の流儀に仏語を適応させると、その聖典の価値を失う恐れがあったと指摘している (ルヌー & フォリオザ (山本智教 訳) [1979-1981 iii: §1943 p. 13.a14-b6] を参照)。村上真完も、仏典に散見される、韻文を戒める記述に注視している (村上・及川 [1990: pp. 162.6-168.14, pp. 280.9-282.11] を参照)。
- 6) 有部典籍にしばしば列挙される、『ウダーナ』 (*Udāna*)、『パーラーヤナ』 (*Pārāyaṇā*)、『アルタヴァルギーヤ』 (*Arthavargiya*)、『正見』 (*Satṭṛṣa*)、『長老偈』 (*Sthaviragāthā*)、『長老尼偈』 (*Sthavirīgāthā*)、『シャイラ偈』 (*Śailagāthā*)、『牟尼偈』 (*Munigāthā*) などの偈頌文献は、古くから有部の「雑蔵」を構成する文献であると考えられている。Lamotte, É. [1957]、前田恵善 [別1 (= 1964): pp. 681-698]、渡辺文麿 [1979]、八尾史 [2013: p. 53 註1] などを参照。なお、本庄良文 [2014 i: pp. 32.1-33.1] は、俱舍論註『ウパーイカー』 (AKUp.) の記述を基に、『勝義偈』 (*Paramārthagāthā*)、『餓鬼アヴァダーナ』 (*Pretāvadāna*) なども「雑蔵」に含まれることを明らかにしている。
- 7) Vin. (Vol. II p. 139.1-16):

Tena kho pana samayena yameḷutekulā<sup>(1)</sup> nāma bhikkhū dve bhātikā honti brāhmaṇajātikā kalyāṇavācā kalyāṇavākkaraṇā. Te yena bhagavā ten' upasaṅkamiṃsu, upasaṅkamitvā bhagavantaṃ abhivādetvā ekamantaṃ nīdiṃsu. Ekamantaṃ nisinnā kho te bhikkhū bhagavantaṃ etad avocaṃ - “etara-

hi, bhante, bhikkhū nānānāmā nānāgottā nānājaccā nānākulā pabbajitā. Te sakāya niruttiyā buddhavacanam dūsentī. Handa mayam, bhante, buddhavacanam chandaso āropemā” ti. Vigarahi buddho bhagavā …中略… “na, bhikkhave, buddhavacanam chandaso āropetabbam. Yo āropeyya, āpatti dukkaṭṭassa. Anujānāmi, bhikkhave, sakāya niruttiyā buddhavacanam pariyā-puṭitun” ti.

さてその時、ヤメールとテークラという名前の二人の比丘がいて、〔彼らは〕兄弟で、婆羅門出身であり、見事な声と、見事な言葉遣いをしていた。彼らは世尊のいるところに近づき、近づいてから世尊に礼拝し、一方に坐した。一方に坐したこの二人の比丘は、世尊に次のことを尋ねた。『尊師よ、いま比丘たちは、様々な名をもち、様々な姓をもち、様々な出身であり、様々な家柄のものとして出家しました。彼らは自らの言語 (nirutti) によって仏語を汚しています。さあ尊師よ、私たちは仏語を韻律 (chandas) になおしましょう』と。仏世尊は叱責した…中略…。『比丘らよ、仏語を韻律 (chandas) になおしてはならない。もしなおせば悪作に墮す。比丘らよ、自らの言語 (nirutti) で仏語を学習することを許す』と。

(1) PTS: yameḷakekulā, VRI: yameḷakekuṭṭa

この箇所に対応する漢訳資料については村上・及川 [1990: pp. 163.17-167.9] を参照。また上訳で「韻律」と訳した chandas (および sakāya nirutti) が何を意味するのかについては議論の余地があり、「ヴェーダ」や「サンスクリット」などとも訳される (近年の研究としては村上・及川 [1990: pp. 162-174]、西村実則 [1987]、Norman, K.R. [1: pp. 122-124] [4: pp. 156.6-157.17] [1997: p. 60.3-27]、Levman, B. [2009] などを参照)。

しかしながら、上記パーリ律では「仏語」が主題となっており、それは「ヴェーダ」ではないから、chandas を「ヴェーダ」と訳すことには違和感がある。この一方で、村上・及川 [1990: pp. 167.19-168.2, pp. 280.9-282.11] が指摘するように、ヴェーダ自身が韻文であることや、ヴェーダ補助学のうち chandas は「韻律書」という意味で用いられることから (中村元 [8: p. 586.12-14]、辻直四郎 [1: p. 16.4-8] も参照)、ここでの chandas を「韻律」と訳すことは文脈的に無理がない。たとえば「セーラ経」(Sn. 548-573, MN. 92) にある偈では、chandas を明らかに「韻律」(もしくは「ヴェーダ」) の意味で用いている。

Sn. 568; Vin. (Vol. I p. 246.33-34); MN. 92 (Vol. II p. 146<sup>(1)</sup>):

Aggihuttamukhā yaññā, sāvitti chandaso mukhaṃ;

Rājā mukhaṃ manussānaṃ, nadinaṃ sāgaro mukhaṃ.

諸々の供儀は火への供養を最上とし、サーヴィッティは韻律 (chandas) の中の最上であり、王は人々の中の最上であり、海は河川の中の最上である。

(1) Sn. に含まれるとして MN. では省略されている

もちろん、上座部註釈文献における解釈を手掛かりにして chandas を「サンスクリット」と解することも不可能ではない。しかしその場合には、説一切有部が初期經典をサンスクリット化している事実と矛盾を起こしてしまうことになる。むしろ chandas を「サンスクリット」と解することが出来たことは、パーリ語で聖典を保持し続けた上座部の事情を考慮する必要があるだろう (同時に、村上・及川 [1990: p. 167.5-9] が指摘するように、説一切有部ではサンスクリット化された初期經典を保持していたために、この箇所

一方、上座部における「小部」の受容という面では、Adikaram, E.W. [1946: pp. 24-32] や森祖道 [1984: pp. 274-282] が、註釈文献に残された誦者 (bhāṇaka) の用例を網羅的に検討することで、他の四部については誦者の存在が確認できるのに対して、小部についてはその存在が殆ど確認できないことを指摘した。これは、小部の流布形態が他とは異なっていたことを明らかにした点で画期的な成果である。同様に櫻部建 [2002b: pp. 18.11-19.16] も、小部に含められる諸経が主として韻文資料であることに着目し、その流布形態が散文資料を主とする他四部とは異なっていた可能性に言及している。このような韻文資料に見られる特性は、それらが“読誦經典”として在家者や初学者たちのあいだに流布していたことから窺い知れるだろう<sup>8)</sup>。

以上の成果を受け継ぎながら、上座部三蔵形成史について注目すべき成果を挙げたのは馬場紀寿による研究である。馬場紀寿 [2008: pp. 159-195] は、「小部」の形成史を五段階に分けながら、ブッダゴーサと小部の関係について次の三点を指摘した。

(1) ブッダゴーサが登場する以前には、經藏を四部とする説と、それに小

---

の chandas を「サンスクリット」と解することが出来なかった可能性も考慮しなければならない。このような点からも、上記のパーリ律における chandas は「韻律」の意味で理解することが、ここでは最も穏当であろう。

なお、Norman, K.R. [1: pp. 122-124] [4: pp. 156.6-157.17] は、上記パーリ律に出てくる chandaso を分析して、それが名詞「韻律」(chandas) の変化形ではなく、名詞「願望」(chanda) に副詞的後接辞 -so (Skt. -śas) を付加した形であるとして「as desired」という訳語の可能性を主張している。しかしこの理解は、「文法的には可能である」というだけであって、対応する漢訳資料や上座部註釈文献から積極的に裏付けられるものではない。

8) Lévi, S. [1915]、石上善応 [1956] [1968]、南清隆 [1984] を参照。有部における読誦經典については佐々木閑 [1985]、吹田隆道 [1988] [1992]、Skilling, P. [2000] を参照。十一世紀ごろのインド仏教における読誦經典については加納和雄 [2011] を参照。

また、これら詩的作品が、後代の上座部においても“読誦經典”として流布していた事実は、パーリ律波逸提法第四条〈未受具戒人同誦戒〉に対する註釈からも窺い知ることが出来る。このパーリ律の規定に従えば、未受戒者と「法」を唱和してはならないはずである。しかし『律註』の例外規定に従えば、たとえ「法」であってもそれが詩的作品であれば唱和が許されるという。VinA. (Vol. IV pp. 742.21-29) を参照。そして隠没伝承においても、最後に偈頌が流布しているのは在俗者のあいだである。ANA. i, 10, 33 (Vol. I pp. 88.14-89.25) を参照。

部を加えて五部とする説との二つが併存していた。そのうち経蔵を四部とする説が有力であった。

- (2) この状況に対してブッダゴーサは、この両説のうち五部説を採用し、さらに小部を現行の十五書に固定した。
- (3) このブッダゴーサによって規定された小部（ならびに三蔵）の構成内容が、その後の上座部に決定的な影響力を及ぼした。これによって上座部三蔵は「正典」(Canon) とも呼ぶべき排他性と固定性を備えるようになった。

すなわち、「上座部三蔵の排他性・固定性」は、ブッダゴーサが抱いていた独自の思想性によって決定づけられた、ということである<sup>9)</sup>。この結論を是とするならば、従来たびたび言及された「新説を立てず、必ずしも独創的な思想家ではなかった」とするブッダゴーサの人物像を刷新するものである<sup>10)</sup>。

このように上座部の小部を巡る研究は、三蔵の形成史に光を当てるだけでなく、上座部の教団史や、註釈家ブッダゴーサの独自性の解明までも、その視野に収めていると言える。

## (b) 本研究の目的

本研究は、上記で述べた研究状況を踏まえた上で、とりわけ先述した馬場紀寿が用いた資料を材料としながら、上座部における小部の成立・受容の実態を再検討することを目的とする。ここで本稿の結論を先取りするならば、次の三点に集約される。

- (1) 四部から五部への経蔵再編集はブッダゴーサが登場する前に既に完了

---

9) このような上座部三蔵の排他性・固定性は、Collins, S. [1990] (= [2005])、Norman, K.R. [1997: pp. 131-148] によっても指摘されている。馬場紀寿 [2008] の大きな特色は、そのような性質を具える至った要因をブッダゴーサの独自思想性に帰している点にある。

10) 前田恵學 [別 1 (= 1964): pp. 804.12-805.17]、Warder, A.K. [1981: pp. 200.38-201.14] を参照。一般的に上座部註釈家は総じて没個性的であると評価される。



していた。

(2) しかし小部は、他の四部ほど重要視されておらず、上座部教団内にも誦者や伝持者が極めて限定的にしか存在しなかった。この地位の不安定さゆえに、小部が経蔵の第五部として三蔵に加えられた後も、その実質的な内容は長いあいだ定まらなかった。

(3) ブッダゴーサが小部を十五書に定めたことが、その後の上座部において定説となったが、ブッダゴーサ自身が積極的・能動的に小部を十五書に限ろうとしていたわけではない。

このように本稿は、馬場紀寿による研究と同じ資料を用いながらも、それとは異なる結論に行き着いている。この最も大きな理由は、馬場紀寿が上座部における結集伝承と隠没伝承に対して「経蔵四部構成の古資料を伝えている」と評価するのに対して、本稿は「すでに経蔵が五部であった痕跡が残されている」と評価するからである。

これを主張するために本稿では、全二章の構成をとる。まず第一章において上座部三蔵の結集と隠没の両伝承における小部の扱いを考察して、「小部は、三蔵に含まれながらも、他の三蔵聖典（律蔵・四部・阿毘達磨）ほどには権威が認められていなかった」という点を結論付け、「その権威の低さゆえに小部は、結集伝承や隠没伝承において他の三蔵聖典とは異なった扱いを受けていた」という仮説を提示する。この仮説を受け入れるならば、「小部が体系的に説かれていないので経蔵は四部のままである」とする馬場説は必ずしも成立しなくなる。この結論を引き継ぎながら、続く第二章では上座部における小部の成立と受容の過程について考察して、ブッダゴーサが三蔵編纂に果たした役割を明確化させる。

## 第一章 結集伝承と隠没伝承における小部

本章では、三蔵の結集と隠没を考察の材料として、上座部における「小部」の権威性について考察する。上座部註釈文献に残る伝承によれば、仏陀の残し



た膨大な量の教説は、仏滅後に開催された結集において三蔵という形で纏められたが、時代共にその三蔵は減びてゆき、やがて全て消滅（隠没）してしまうと考えられている。このような伝承のなかで小部はどの様に扱われているのであろうか。

さて、問題の所在において既に述べたように、仏教の各部派ともに、四部四阿含から漏れた雑余の經典を収めた集成を保持していたことが明らかになっている。それではこの集成が、その他の四部四阿含と同等の扱いを部派内で受けていたのか、といえそうではない。これは説一切有部の「正法の滅尽」（上座部の隠没伝承に相当<sup>11)</sup>）における「小（雑）蔵／阿含」の扱いから確認することが出来る<sup>12)</sup>。上座部と同様に有部においても未来において仏教の教説が減びてしまうという伝承を有している。その正法の存続・消滅について有部は、經（阿含）・律・阿毘達磨の三蔵が失われているか否かを判定基準の一つに定めている<sup>13)</sup>。ところが有部資料において「四蔵」「五阿含」という総称は存在せず<sup>14)</sup>、そして雑蔵は三蔵外に置かれていた記述が存在するから<sup>15)</sup>、雑蔵を正

11) 説一切有部における「隠没」とは、過去に失われてしまった仏教の教えを意味する。

12) 説一切有部においては、この集成に対して「小（雑）蔵」（Kṣudraka-piṭaka）と「小（雑）阿含」（Kṣudraka-āgama）という二通り呼び方のあったことが確認される（本庄良文 [2014 i: p. 32.1-33.1] を参照）。この「小（雑）蔵」と「小（雑）阿含」という二つが同一であるか別異であるか不明である。また、現存する有部資料中に、この「雑（小）蔵／阿含」への言及が殆どないため、その内容も全く不明である。なお、周柔含 [2009: pp. 220-221 註37] は、有部は雑蔵を認めなかったと主張している。だが、その根拠として挙げられている『順正理論』の文言は、「阿毘達磨の代わりに三蔵の一角として雑蔵が置かれぬ」ということを主張していて、雑蔵は「經」の一種として認められていると読み得る（この箇所の現代語訳については本庄良文 [2010: p. 186.5-14] を参照）。しかし有部の経蔵に第五阿含の存在を示す資料は殆ど存在せず、雑“蔵”であるからには、本来ならば経蔵や律蔵と並んでおかれるべきはずである。このように有部における「雑（小）蔵／阿含」の立ち位置付けは未解明の部分が多い。

13) 『十誦律』巻49 (T23. 358c02-c13)、『大毘婆沙論』巻183 (T27. 917c20-23)、巻183 (T27. 918c09-13)、AKBh. (pp. 459.15-460.3) を参照。

14) もちろん「四阿含（阿笈摩）」「三蔵」という総称は確認される。たとえば「四阿含（阿笈摩）」への言及は、『薩婆多毘尼毘婆沙』巻3 (T23. 519a15)、『薩婆多毘尼毘婆沙』巻9 (T23. 559c14)、『根本有部毘奈耶』巻7 (T23. 662a27-28)、『根本有部苾芻尼毘奈耶』巻4 (T23. 925c05)、『根本有部苾芻尼毘奈耶』巻20 (T23. 1014c11-13)、『大毘婆沙論』巻12 (T27. 58a16-17)、『大毘婆沙論』巻61 (T27. 314a29)、『大毘婆沙論』巻180 (T27. 904a05)、『毘曇婆沙論』巻28 (T32. 236c29)、『鞞婆沙論』巻1 (T28. 418b10)、『順正理論』巻70 (T29. 722c16-17)、『藏頭宗論』巻33 (T29. 937c18)、Divy. (p. 333.8-9) を参

法の体として認めなかった解釈が存在したことを窺わせる<sup>16)</sup>。また有部律に対する解説書『薩婆多毘尼毘婆沙』では、波羅夷第四条〈妄説得上人法戒〉(悟らないのに悟ったと嘘を言うこと)<sup>17)</sup>を詳説して、四阿含を誦していないのに誦したと嘘をつくことを禁じており、これに続いて阿毘達磨と律に関する禁止事項も説かれるが、「雑(小)蔵／阿含」については等閑視されたままである<sup>18)</sup>。このように有部は「雑(小)蔵／阿含」を保持していたにも関わらず、それを取り上げることは殆どない。従って、有部において「雑(小)蔵／阿含」は、蔵(piṭaka)もしくは阿含(āgama)の名称が附されておきながらも、その他の三蔵・四阿含ほどには重要視されていなかったと考えられる<sup>19)</sup>。

照。

そして「三蔵」への言及は、『十誦律』巻60(T23. 447b12-14, 450b11)、『大毘婆沙論』巻7(T27. 34a27-28)、『大毘婆沙論』巻29(T27. 148a03)、『毘曇婆沙論』巻1(T28. 2a06-13)、『毘曇婆沙論』巻3(T28. 24c18)、『鞞婆沙論』巻1(T28. 416b24)、『順正理論』巻44(T29. 595b06-07)、『蔵頭宗論』巻24(T29. 892a14-15)など、有部典籍の各所に確認される。

また、『順正理論』巻1(T29. 330b28-c03)では、阿毘達磨蔵の代わりに雑蔵を加えて「三蔵」にすべきと主張する論難者に対して、衆賢は経・律・阿毘達磨の三つが「三蔵」であると主張している。さらに『瑜伽師地論』巻85(T30. 772c09-773a1)では、「事契経」を説明して四阿含の構成に言及しているが、そこに「小(雑)阿含」は含まれていない。

- 15) 有部所伝と考えられる『出曜経』巻1(T04. 610c12)、巻7(T04. 645b25-26)、巻17(T04. 702c02, 703a07)においても、経・律・阿毘達磨に続いて「雑蔵」の名称が提示されているが、同書の別箇所『出曜経』巻29(T04. 766c02)を参照)では雑蔵を除いた「四阿含三蔵」だけが言及されている。

また有部の一系統であると考えられる『成実論』巻14(T32. 352c15)では、三蔵の外側に「雑蔵」と「菩薩蔵」を加えて五蔵としている。おそらく馬場紀寿[2011: p. 75.3-8]が指摘するように、有部(もしくは北伝仏教)では上座部と比べて保持する聖典の範囲にある程度の緩さが認められていたのであろう。

- 16) ただし『順正理論』巻1(T29. 330b06-c03)において衆賢は、対論者に答えて「雑(小)蔵」を経の一部と位置付ける説を紹介している。しかしその場合、本来ならば「雑(小)阿含」と表記されるべきであるから、不整合な説明となっている。また『順正理論』巻70(T29. 722c16-17)、『蔵頭宗論』巻33(T29. 937c18)では四阿含(阿笈摩)を一組にして言及している。
- 17) 条文の内容・仔細については平川彰[14: pp. 298.8-334.19]を参照。
- 18) 『薩婆多毘尼毘婆沙』巻3(T23. 519a15-16)
- 19) 「小(雑)蔵」と「小(雑)阿含」の呼称は限定的にしか確認されないが、それを構成している諸経は頻繁に引用される。この現象は上座部における「小部」の場合と同一である。おそらく説一切有部も上座部も、当初は「四阿含・律・阿毘達磨」(三蔵)と「それ以外」という括りで聖典を保持していたと予想される。

一方の上座部では、小部を経蔵の第五部として三蔵の内に含めているが、以下に本章が考察するように、やはりその他の四部と比して重要視されておらず、その権威は一段落ちていたと結論付けられる。

## 第一節 結集伝承における「大地の震動」

まず本節では、第一結集における小部の扱いを考察する<sup>20)</sup>。上座部において小部の権威が他と比べて劣っていた事実は、第一結集における「大地の震動」の有無から推し量ることが出来る。なぜなら、この「大地の震動」は、聖典の正統性と権威性を保証するための重要な要素として理解されているからである。上座部註釈文献に残る第一結集伝承によれば、律蔵、四部、阿毘達磨蔵が合誦された後に「大地の震動」が起こったことが記されているが、小部の合誦に対してはこれが起きていないのである。さて、この「大地の震動」について、次のように説明されている<sup>21)</sup>。

20) 各部派における第一結集については、塚本啓祥 [1980 (=1966) : pp. 175-284] が詳しい。

21) 律蔵を合誦し終えた時にも「大地の震動」が起きている。

DNA. (Vol. I p. 13.4-7):

Evaṃ sattavisādhikāni<sup>(1)</sup> dve sikkhāpadasatāni “mahāvibhaṅgo” ti kittetvā ṭhapesuṃ. Mahāvibhaṅgāvasāne pi purimanayen’ eva mahāpathavi akampittha. このようにして、二百二十七の学処を「大分別」と称賛して定めた。大分別の終わりにも、先のとおりに大地が震動した。

(1) PTS: visādhikāni, VRI: sattavisādhikāni

DNA. (Vol. I p. 13.14-22):

Evaṃ tiṇi sikkhāpadasatāni cattāri ca sikkhāpadāni “bhikkhunīvibhaṅgo” ti kittetvā - “ayaṃ ubhato vibhaṅgo nāma catusaṭṭhibhāṇavāro<sup>(1)</sup>” ti ṭhapesuṃ. Ubhatovibhaṅgāvasāne pi vuttanayen’ eva mahāpathavikampo ahoṣi. Eten’ eva upāyena asītibhāṇavārāparimāṇaṃ khandhakaṃ, pañcavīsati bhāṇavārāparimāṇaṃ parivāraṇ ca saṃgahaṃ āropetvā “ayaṃ<sup>(2)</sup> vinayapiṭakaṃ nāmā” ti ṭhapesuṃ. Vinayapiṭakāvasāne pi vuttanayen’ eva mahāpathavikampo ahoṣi. このようにして、三百四の学処を「比丘尼分別である」と称賛して、「この両分別は、六十四の誦分である」と定めた。両分別の終わりにも、先に述べたとおりに大地の震動が起こった。この方法で、八十誦量分の「捷度」を、二十五誦量分の「附随」を結集に載せて「これは律蔵である」と定めた。律蔵の終わりにも、先に述べたとおりに大地の震動が起こった。

(1) PTS: -vārā, VRI: -vāro

(2) PTS: idaṃ, VRI: ayaṃ

DNA. (Vol. I p. 12.24-30):

Evaṃ pakkhipitabbayuttaṃ pakkhipitvā pana - “idaṃ paṭhamam  
pārājikan<sup>22)</sup>” ti ṭhapesuṃ. Paṭhamapārājike saṃgaham ārūḷhe pañca  
arahantasatāni saṃgaham āropitanayen’ eva gaṇasajjhāyam akaṃsu -  
“tena samayena buddho bhagavā verañjāyam viharatī” ti. Tesam<sup>23)</sup>  
sajjhāyāraddhakāle yeva sādhu-kāram dadamānā viya mahāpathavī  
udakapariyantam katvā akampittha.

このように追加されるに相応しいものを追加して「これが第一波羅夷である」と定めた。第一波羅夷が結集に載せられたとき、五百人の阿羅漢たちは、結集に載せた方法の通りに、「その時、仏世尊はヴェーランジャーに滞在していた」と集成誦唱した。彼らが誦唱しはじめたとき、賛辞（sādhukāra）を与えるかのように、大地が水を周辺として震動した。

ここでは「大地の震動」が「賛辞（sādhukāra）を与えること」と同義に理解されている。この賛辞（sādhukāra）とは、初期經典において仏陀が「その通りです、その通りです（sādhu sādhu）」などと随喜することで仏弟子たちが説いた教説を事後承認することである。上座部註釈家たちは、この賛辞を以て、仏弟子たちの説いた教説にも“仏説”と同等の権威が付託されるものと理解している<sup>24)</sup>。すなわち、第一結集において起きた「大地の震動」は、そこで収載された聖典が“仏説”に適った正統なるものであることを保証しているのである。この「大地の震動」は、上記にある律蔵の合踊に続いて、四部の合踊と、阿毘達磨蔵の合踊において等しく言及されているが<sup>25)</sup>、小部（小書）の合

22) PTS: paṭhamam pārājikan, VRI: paṭhamapārājikan

23) PTS: ca nesam, VRI: tesam

24) 清水俊史 [2015e]

25) DNA. (p. 14.23-27):

Atha kho āyasmā Mahākassapo āyasmantaṃ Ānandaṃ Brahmajālassa nidānam pi pucchi, puggalam pi pucchi, vatthum pi pucchi. Āyasmā Ānando vissajjesi. Vissajjanāvasāne pañca arahantasatāni sajjhāyam<sup>(1)</sup> akaṃsu. Vuttanayen’ eva ca pathavīkampā ahosi.

そこで長老マハーカッサパは、長老アーナンダに「梵網〔経〕」の因縁についても尋ね、人についても尋ね、事柄についても尋ねた。〔それに〕長老アーナンダは答えた。

踊においては言及されず次のように説明されているだけである。

DNA. (Vol. I p. 15.22-29):

Tato paraṃ Jātakam, Niddeso<sup>26)</sup>, Paṭisambhidāmaggo<sup>27)</sup>, Suttanipāto<sup>28)</sup>, Dhammapadam, Udānam, Itivuttakam, Vimānavatthu, Petavatthu, Thera-Therigāthā<sup>29)</sup> ti imaṃ tantim saṃgāyitvā “Khuddakagantho nāma ayan<sup>30)</sup>” ti ca vatvā “Abhidhammapīṭakasmim yeva saṃgaham āropayimsū” ti Dīghabhāṇakā vadanti. Majjhimbhāṇakā pana “Cariyāpīṭaka-Apadāna-Buddhavaṃsesu<sup>31)</sup> saddhim sabbam pi tam<sup>32)</sup> Khuddakagantham nāma Suttantapīṭake pariyāpannan” ti vadanti.

それから後に、『ジャータカ』『義釈』<sup>33)</sup>『無礙解道』<sup>34)</sup>『スッタニパータ』<sup>35)</sup>

答えの終わりに、五百人の阿羅漢たちが誦唱した。先のとおりに大地が震動した。

(1) PTS: sajjhāyam, VRI: gaṇasajjhāyam

DNA. (p. 15.14-21):

Tato anantaram Dhammasaṃgani-Vibhaṅgañ ca Kathāvatthuñ ca Puggalaṃ Dhātu-Yamaka-Paṭṭhānaṃ<sup>(1)</sup> abhidhammo ti vuccati<sup>(2)</sup>. Evaṃ saṃvaṇṇitam sukhumaññāgocaraṃ tantim saṃgāyitvā - “idaṃ abhidhammapīṭakam nāmā” ti vatvā pañca arahantasatāni sajjhāyam akaṃsu. Vuttanayen’ eva pathavikampo ahosi<sup>(3)</sup>.

その直後に、『法集論』『分別論』『論事』『人施設論』『界論』『双論』『発趣論』という阿毘達磨がある、と言われる。このように称赞される微細な智の領域である聖文 (tanti) を合誦して「これが阿毘達磨蔵と呼ばれる」と言い、五百人の阿羅漢たちが誦誦した。先に述べたとおりに大地の震動が起こった。

(1) PTS: Dhammasaṃgani-Vibhaṅgañ ca Kathāvatthuñ ca Puggalaṃ Dhātu-Yamaka-Paṭṭhānaṃ, VRI: dhammasaṅgahavibhaṅgadhātukathāpuggalapaññattikathāvatthuyamakapaṭṭhānaṃ

(2) PTS: vuccati ti, VRI: vuccati

(3) PTS: ahosi, VRI: ahosī ti

26) PTS: Mahāniddeso Cūlaniddeso, VRI: Niddeso

27) PTS: *omit*, VRI: *add* Apadānaṃ

28) PTS: *omit*, VRI: *add* Khuddakapāṭho

29) PTS: Thera-Therigāthā, VRI: Theragāthā Therigāthā

30) PTS: nāma ayan, VRI: nāmāyan

31) PTS: Cariyāpīṭaka-Apadāna-Buddhavaṃsesu, VRI: cariyāpīṭakabuddhavaṃsehi

32) PTS: pi etaṃ, VRI: p’ etaṃ

33) PTS では『大義釈』と『小義釈』の両書に分けて言及しているが、先行研究との整合性を勘案して、ここでは『義釈』とする。

34) VRI 版に従うならば、ここに『アパダーナ』が挿入されており、長部誦者と中部誦者

『ダンマパダ』『ウダーナ』『イティヴッタカ』『天宮事』『餓鬼事』『長老偈』『長老尼偈』という、これらの聖文 (tanti) を合誦して「これは小書 (Khuddaka-gantha) と呼ばれる」と言い、長部誦者たちは「阿毘達磨藏において結集に載せた」と主張する。しかし中部誦者たちは「『チャリヤーピタカ』『アパダーナ』<sup>36)</sup>『ブッダヴァンサ』とともに、このすべての小書と呼ばれるものは、経藏に収められた」と主張する<sup>37)</sup>。

ともに小部 (小書) として認めていたことになる。

35) VRI 版に従うならば、ここに『クッダカパータ』が挿入される。しかしこれは後代に、小部十五書の定義にあわせて齟齬が起きぬように付与されたものであると考えられる。馬場紀寿 [2008 : pp. 228-229 註36] を参照。

36) VRI 版に従うならば、この箇所『アパダーナ』は削除される。

37) PTS 版と VRI 版との間で『クッダカパータ』の有無、ならびに『アパダーナ』の扱いに相違点が確認される。この違いをどの様に評価するかは難しい問題であるが、ひとまずここでは PTS 版に従う。なお、『クッダカパータ』は、VRI 版においてのみ言及される。また、『アパダーナ』については、PTS 版に従えば、中部誦者のみがこれを小書に含めていたことになる。一方の VRI 版に従えば、長部誦者・中部誦者ともに『アパダーナ』を小書のうちに含めており、中部誦者だけが小書として認める典籍は『チャリヤーピタカ』『ブッダヴァンサ』の二つとなる。これを表にすれば次のように纏められる。

	PTS 版		VRI 版	
	長部誦者	中部誦者	長部誦者	中部誦者
『アパダーナ』		○	○	○
『チャリヤーピタカ』		○		○
『ブッダヴァンサ』		○		○

なお、ダンマパーラによる復註 (DNṬ.) においても記述に揺らぎが見られる。VRI 版では「『チャリヤーピタカ』と『ブッダヴァンサ』は、『ジャータカ』に属する」(Cariyāpiṭakabuddhavaṃsānaṃ) とあって、そこに『アパダーナ』は含まれないが、PTS 版では「『チャリヤーピタカ』や『ブッダヴァンサ』など」(Cariyāpiṭakabuddhavaṃsādīnaṃ) とあり『アパダーナ』が含まれ得る記述になっている (下記の波線部を参照)。

DNṬ. (Vol. I p. 29.13-25):

Jātakādīke Khuddakanikāyapariyāpanne, yebhuyyena ca dhammaniddeśabhūte tādise Abhidhammapiṭake saṅgaṇhituṃ yuttaṃ, na pana Dighanikāyādippakāre Suttapiṭake<sup>(1)</sup>, nāpi paññattiniddeśabhūte Vinayapiṭake ti Dīghabhāṇakā “Jātakādīnaṃ Abhidhammapiṭake saṅgaho” ti vadanti. Cariyāpiṭakabuddhavaṃsādīnaṃ<sup>(2)</sup> c’ ettha agahaṇaṃ, Jātakagatikattā. Majjhimabhāṇakā pana “aṭṭhuppativasena desitānaṃ Jātakādīnaṃ yathānulomadesanābhāvato tādise Suttapiṭake saṅgaho yutto, na pana sabhāvadhammaniddeśabhūte yathādhammasāsane Abhidhammapiṭake” ti Jātakādīnaṃ Suttantapiṭakapariyāpannatam kathayanti. Tattha ca yuttaṃ vicāretvā gahetabbaṃ.

『ジャータカ』などが「小部」に収められるが、〔それらを〕その多くが法を説示するものである阿毘達磨藏に集めることが妥当であり、『長部』などの分類を持つ経藏に〔集めることは妥当では〕なく、また施設 (paññatti) を説示するものである律藏に

ここでは小部の合誦内容について長部誦者と中部誦者との間で見解が分かれており、小部（小書）の構成内容や位置づけについて上座部内で議論のあったことが窺える。このうち中部誦者の見解が、上座部において採用されている<sup>38)</sup>。

この小部（小書）の解説が終わると、第一結集伝承は一旦中断され三蔵五部の諸經典を種々の角度から配分する「仏語の分類」が挿入される<sup>39)</sup>。そしてこの分類説明が終わると再び第一結集の伝承に話が戻り、結集の終わりと共に再び「大地の震動」が起こったことが説かれる<sup>40)</sup>。だがここでの「大地の震動」は、第一結集の終了に対して起こったものであり、小部（小書）の合誦に対して起こったものではない。以上の第一結集記事の次第と、「大地の震動」の有無を纏めれば次のようになろう。

		大地の震動
① 律蔵の合誦	DNA. (Vol. I pp. 12.3-13.26)	○
② 経蔵の合誦	DNA. (Vol. I pp. 13.27-15.13)	○
③ 阿毘達磨蔵の合誦	DNA. (Vol. I p. 15.14-21)	○
④ 小部（小書）の合誦	DNA. (Vol. I p. 15.22-29)	×
⑤ 仏語の分類	DNA. (Vol. I pp. 15.30-24.32)	
⑥ 合誦の終了	DNA. (Vol. I pp. 24.33-25.23)	○

〔集めることも妥当では〕ないゆえに、長部誦者たちは「『ジャータカ』などを阿毘達磨蔵に集めた」と主張する。『チャリヤーピタカ』や『ブッダヴァンサ』などは、『ジャータカ』に属するものとされたので、ここに含められていない。しかし中部誦者たちは「〔説く〕必要が生じた故に説かれた『ジャータカ』などは、随順に応じた説示であるから、そのような経蔵に集めることが妥当である。そして、自性法を説示するものであり、法に応じた教えである阿毘達磨蔵に〔集めることは妥当では〕ない」と説く。

(1) PTS: Suttapiṭake, VRI: Suttantapiṭake (always)

(2) PTS: -āḍinañ, VRI: -ānañ

このダンマパーラの復註において確認される異読は、小部十五書という枠組みを重んじて、それと整合性を持たせるために加筆された結果であろう。

38) ただしブッダゴース以前の著作においても、長部誦者の見解を反映した三蔵の構成が言及される用例はないようである。パーリ律 (Vin.) の附随や『島史』 (Dv.) において、一般的に阿毘達磨は「七論」と表現されるため、これら小書十一書がそこに入り込む余地はない。Vin. (Vol. V p. 3.4-5)、Dv. 7, 43 (p. 52.19-21)、Dv. 18, 13 (p. 97.5-6)、Dv. 18, 19 (p. 97.18-199、Dv. 18, 33 (p. 98.19-20) を参照。

39) ここで挿入されている「仏語の分類」は、結集された聖典を種々の角度から分析する内容であって、第一結集において起こった出来事を伝えているものではない。

40) DNA. (p. 25.15-21)



このように、「律蔵→四部（経蔵）→阿毘達磨蔵→小部（小書）」の順で合誦され、そのうち小部（小書）に対してのみ「大地の震動」が起きていない<sup>41)</sup>。この「大地の震動」は、仏陀による事後承認（賛辞）と同義であると理解されていることから、これを欠いている小部（小書）の権威は、他の三蔵と比べて相対的に一段落ちるものと考えられる<sup>42)</sup>。

## 第二節 隠没伝承における小部の痕跡

続いて、上座部にのこる隠没伝承から、そのなかの小部の立ち位置を考察する。上座部では、時代が進むとともに正しい教え（sāsana）が徐々に衰退してゆき、やがて消滅してしまうと理解されている。この仏教の正しい教え（sāsana）の消滅は、(1)証得（聖果の獲得）、(2)正行（正しい実践）、(3)教法（三蔵）という三つが隠没すること、もしくはこれに(4)外相（威儀や身なり）、(5)遺骨（仏陀の舍利）を加えた五つが隠没することによって引き起こされるが<sup>43)</sup>、この五つのうち「教法（三蔵）が隠没」こそが仏教の正しい教え

41) ⑤「仏語の分類」に対して大地の震動が起っていない理由は、結集された上座部聖典の分類法を示したものであって、第一結集における出来事そのものではないからであると考えられる。

42) 馬場紀寿 [2008: pp. 212.16-213.5] は、小部（小書）に対して「大地の震動」が起きていないことを取り上げて、本来の結集記事は小部（小書）の前で終わっていると判断する。しかし実際には、表にも示したように、⑥「合誦の完成」に対して「大地の震動」が起きているから、この理解は妥当ではない。むしろ本節において示したように「大地の震動」は権威を附託するための記述であると考えられる。

43) この隠没について上座部註釈文献では、(α)証得・正行・教法の三種の隠没だけを説くもの、(β)この三種隠没をもとに外相・遺骨の二隠没を附随的に解説するもの、(γ)五種の隠没をそれぞれ独立させて説くもの、という三パターンが残されている。表に纏めれば次のようになろう。

資料	(1) 証得	(2) 正行	(3) 教法	(4) 外相	(5) 遺骨
(α)	○	○	○	—	—
(β)	○	○	○	△	△
(γ)	○	○	○	○	○

△＝附随的に説かれる

この三パターンの中で、最も素朴な記述のものは(α)であり、逆に最も仔細なものは(γ)である。なお、Mil. (pp. 133.28-134.8) では(1) (2) (4)の三種隠没を説いている。また、これらの隠没伝承のうちに矛盾する記述も散見され、統一的に理解できるわけではない。上座部における隠没伝承の展開については、浪花宣明 [1998: pp. 85-87 註1] も参照。

(sāsana) が減じる根本原因になる<sup>44)</sup>。

馬場紀寿 [2008 : pp. 162-174] は、この「教法（三蔵）の隠没」において三蔵の構成が言及されること、さらにそのなかに小部が体系的に説かれていないことの二点に着目して、これら隠没伝承が経蔵四部構成の旧三蔵に言及していると理解している。ところがこの隠没伝承の取り扱いには重大な問題がある。馬場紀寿は、三種のヴァリエーションが残されている隠没伝承のうち、一つだけに小部の要素が、それも『ジャータカ』だけが取り上げられていることに注目している<sup>45)</sup>。しかし実際には、これら隠没伝承のうちには、『スッタニパータ』に含まれる「サビヤの質問」や、阿毘達磨・四部（経蔵）・律蔵の外側にあってかつ三蔵に含まれる「偈頌」などの「小部」に相当する記述が残されている<sup>46)</sup>。

そこで本節では、これら三種の隠没伝承を考察することで、1) これら諸資料のうちに第五部（小部）に相当する典籍が言及されていること（あるいは小部が存在する余地を残していること）、2) および、小部（とりわけその構成要素の中心である「偈頌」典籍）の権威が低く見られていたために、隠没伝承において小部に明確な位置が与えられなかった可能性を指摘する。

### 第一項 隠没伝承( $\alpha$ )

まず、三種ある隠没伝承のうち、最も記述が素朴な隠没伝承( $\alpha$ )における

44) 仏陀の教え (sāsana) を維持する根本が何であるのかについては議論があったらしい。隠没伝承( $\gamma$ )を伝えるANA. i, 10, 33 (Vol. I pp. 92.22-93.25) では、教法 (pariyatti) が根本であると主張する説法者 (dhammakathika) と、正行 (paṭipatti) が根本であると主張する糞掃衣派の長老 (paṃsukūlikatthera) とのあいだで議論があったことを記録しており、そのうち説法者の説が採用されている。

また、隠没伝承( $\alpha$ )においても、教法 (pariyatti) が隠没によって教え (sāsana) の隠没が引き起こされると述べられている。そして隠没伝承( $\beta$ )を伝えるDNA. 28 (Vol. III p. 898.18-36) においても、「教法」(pariyatti) が隠没することにより「通達」(paṭivedha) と「正行」(paṭipatti) の二つが維持できなくなるという理由で、やはり教法こそが教え (sāsana) を維持する根本であると理解している。

45) 本稿が考察するところの隠没伝承( $\beta$ )においてである。馬場紀寿 [2008 : pp. 163.16-165.4] を参照。

46) あるいは黙殺している。馬場紀寿 [2008 : p. 163.1-10, pp. 224-225 註12, p. 225 註13] を参照。

「教法の隠没」を考察する。三蔵が消滅することで教え（sāsana）が隠没してしまうと次のように説かれている。

SNA. 16, 13 (Vol. II p. 203.6-18):

Yāva pana tepiṭakaṃ buddhavacanaṃ vattati, na tāva sāsanaṃ antarahitan ti vattuṃ vaṭṭati. Tiṭṭhantu tiṇi vā, Abhidhammapiṭake antarahite itaresu dvīsu tiṭṭhantesu pi antarahitan ti na vattabbam eva. Dvīsu antarahitesu Vinayapiṭakamatte ṭhite pi, tatrāpi khandhakaparivāresu antarahitesu ubhatovibhaṅgamatte, mahāvinaye antarahite dvīsu pātimokkhesu vattamānesu pi sāsanaṃ anantarahitam eva. Yādā pana dve pātimokkhā antaradhāyissanti, atha pariyattisaddhammassa antaradhānaṃ bhavissati. Tasmiṃ antarahite sāsanaṃ antarahitaṃ nāma hoti.

【教法の隠没】しかし、三蔵たる仏語が残っている限り、「教え（sāsana）は隠没した」と言うことは出来ない。三〔蔵〕が存在していれば〔もちろん「教えは隠没した」とは言われず〕、阿毘達磨蔵が隠没しても他の二〔蔵〕が存在していれば〔「教えは」隠没した〕とは言われない。二〔蔵〕が隠没しても律蔵が存続していれば〔「教えは隠没した」とは言われず〕、そのなかの犍度・附随が隠没しても両分別が存続していれば〔「教えは隠没した」とは言われず〕、大律が隠没しても二つの波羅提木叉が残っていれば教えは隠没していない。けれども、二つの波羅提木叉が隠没すれば、そのとき教法（pariyatti）の正法は隠没するだろう。それが隠没したときに「教え（sāsana）は隠没した」と言われる。

すなわち「阿毘達磨蔵→経蔵→律蔵（犍度部・附随→両分別→波羅提木叉）」の順で隠没してゆき、最後に波羅提木叉が隠没することによって教法（pariyatti）が隠没したことになり、それこそが「教え（sāsana）の隠没」であると説かれている。ここでは、経蔵の仔細については触れられていないため、そこに小部が含まれ得る解釈の余地を残している。

## 第二項 隠没伝承(β)

前項において検討した隠没伝承(α)では、経蔵が四部であるか五部であるか言及がないため、小部の扱いは不明確であった。続いて別の註釈文献に残されている隠没伝承(β)の「教法（三蔵<sup>47)</sup>）の隠没」を検討する。この隠没伝承(β)では、経蔵（四部）の隠没と律蔵の隠没のあいだに、小部に相当すると考えられる「偈頌」の存在が言及されている<sup>48)</sup>。

DNA. 28 (Vol. III p. 898.36-899.18):

Yadā pana sā antaradhāyati tadā paṭṭhamam Abhidhammapiṭakam nassati. Tattha Paṭṭhānam sabbapaṭṭhamam antaradhāyati. Anukamena pacchā Dhammasaṅgaho. Tasmim antarahite itaresu dvīsu Piṭakesu ṭhitesu sāsanaṃ ṭhitam eva hoti. Tattha Suttantapiṭake antaradhāyamāne paṭṭhamam Aṅguttaranikāyo Ekādasakato paṭṭhāya yāva ekakā antaradhāyati. Tadanantaram Saṃyuttanikāyo Cakkapeyyālatō paṭṭhāya yāva Oghataraṇā antaradhāyati. Tadanantaram Majjhimanikāyo Indriyabhāvanato paṭṭhāya yāva Mūlapariyāyā antaradhāyati. Tadanantaram Dīghanikāyo Dasuttarasuttato<sup>49)</sup> paṭṭhāya yāva Brahmajālā antaradhāyati. Ekissā pi dvinnam pi gāthānam pucchā addhānam gacchati; sāsanaṃ dhāretum na sakkoti Sabhiyapucchā viya Ālavakapucchā viya ca. Etā<sup>50)</sup> kira Kassapabuddhakālikā antarā sāsanaṃ dhāretum nāsakkhimsu. Dvīsu pana Piṭakesu antarahitesu pi Vinayapiṭake ṭhite sāsanaṃ tiṭṭhati. Parivārakhandhakesu antarahitesu ubhato Vibhaṅge ṭhite ṭhitam eva hoti. Ubhato Vibhaṅge antarahite Mātikāya ṭhitāya pi ṭhitam eva hoti. Mātikāya antarahitāya

47) DNA. 28 (Vol. III p. 898.19-20):

Tattha **pariyatti** ti tiṇi piṭakāni.

そのうち「教法」とは三蔵である。

48) なお、VibhA. (p. 432.12-32)においても、この隠没伝承(β)と同文が含まれている。

49) PTS: Dasuttara-suttato, VRI: Dasuttarato

50) PTS: ekā, VRI: etā

Pātimokkhapabbajjāupasampadāsu ʔhitāsu<sup>51)</sup> sāsanaṃ tiṭṭhati.

【阿毘達磨藏の隠没】さて、これが隠没する時には、最初に阿毘達磨藏が消滅する。そのうち、『発趣論』が全てのうちで初めに隠没する。順に〔隠没していき〕、最後に『法集論』が〔隠没する〕。それが隠没したとしても、他の二つの藏が存続している間は、教えは存続する。【経藏の隠没】そのうち経藏が隠没する時には、最初に『増支部』が第十一集からはじまって第一集に至るまで隠没する。この直後に、『相应部』が「輪中略」からはじまって「渡暴流」に至るまで隠没する。この直後に、『中部』が「根修習」からはじまって「根本法門」に至るまで隠没する。この直後に、『長部』が「十上经」からはじまって「梵網」に至るまで隠没する。【偈頌について】一つ、二つの偈頌として質問が残存していても、〔それは〕教えを保つことが出来ない。「サビヤの質問」や「アーラヴァカの質問」のようにである。伝え聞くに、これら〔の質問〕は、カッサパ仏の時代に属するものだが、教え（sāsana）を保つことが出来なかった。【律藏の隠没】さらに二つの藏が隠没しても、律藏が存続している間は、教えも存続している。附随と犍度部が隠没しても、両分別が存続していれば、〔教えも〕存続している。両分別が隠没しても、論母が存続していれば、〔教えも〕存続している。論母が隠没しても、波羅提木叉と出家・具足とが存続していれば、教え（sāsana）は存続している。

すなわち「阿毘達磨藏（七論）→経藏（四部）→律藏（附随→犍度部→両分別→論母→波羅提木叉・出家・具足）」の順で隠没すると説かれている。ここで注目されるのは、四部の隠没記事に続いて「偈頌」に関する記述が挿入され、たとえ偈頌が残っていてもそれは教えを保つには十分ではない、と評価されている点である。ここで言及されている「サビヤの質問」と「アーラヴァカの質問」は、小部の『スッタニパータ』に含まれる偈頌に他ならない<sup>52)</sup>。註釈文献に残された因縁によれば、これらの偈頌は、カッサパ仏の時代に説かれたもの

51) PTS: *omit*, VRI: *add* ʔhitāsu

52) Sn. 181-192, Sn. 510-547

であり、シャカ仏が出現するまでの無仏のあいだ天界に保存されていたと理解されている<sup>53)</sup>。

このように隠没伝承( $\beta$ )では、小部への直接言及はないものの、そこに含まれる偈頌を喩えに出しながら、それが仏教の教えを保つのに不十分であると述べている。このことは、上座部三蔵における偈頌に対する評価を、ひいては主としてその偈頌によって構成される小部の位置付けを反映していると考えられる。

### 第三項 隠没伝承( $\gamma$ )

最後に、上座部に残される三種の隠没伝承のうち、最も詳細な隠没伝承( $\gamma$ )における「教法(三蔵<sup>54)</sup>)の隠没」を検討する。この隠没伝承( $\gamma$ )は他の二つ

53) SnA. 181-192 (Vol. I p. 228.22-28):

Kuto pan' assa te pañhā ti? Tassa kira mātāpitaro kassapaṃ bhagavantaṃ payirupāsītva aṭṭha pañhe savissajjane uggahesum. Te daharakāle ālavakaṃ pariyāpuṇāpesum. So kālaccayena vissajjanaṃ sammussi<sup>(1)</sup>. Tato “ime pañhā pi mā vinassantū” ti suvaṇṇapaṭṭe jātihiṅgulakena likhāpetvā vimāne nikkhipi. Evam ete buddhapañhā buddhavisayā eva honti.

【問】しかしこの質問はどこから〔得られたのか〕。【答】伝え聞くに、彼の母と父は、カッサパ世尊に敬奉して、八つの質問と〔その〕回答を学んだ。彼らはアールヴァカが幼少の時に〔彼にその質問と回答を〕学ばせた。彼は時が経つと、回答を忘れてしまった。それゆえに「この質問が消えてしまわないように」と、黄金の板に朱墨で記して宮殿に置いた。このように、これら仏への質問は、仏を対象とするものだけであった。

(1) PTS: pammussi, VRI: sammussi

54) 隠没伝承( $\gamma$ )においても教法は三蔵であると定義されるが、三蔵に先立って註釈(アッタカター)が失われ、それに続いて三蔵が失われると理解されている。

ANA. i, 10, 33 (Vol. I p. 88.3-14):

**Pariyatti** ti tepītakam buddhavadanāṃ sātthakathā pāji. Yāva sā tiṭṭhati, tāva pariyatti paripuṇṇā nāma hoti. Gacchante gacchante kāle kaliyugarājāno<sup>(1)</sup> adhammikā honti, tesu adhammikesu rājāmaccaḍḍayo adhammikā honti, tato raṭṭhajanapadavāsino ti. Etesaṃ adhammikatāya na devo sammā<sup>(2)</sup> vassati, tato sassāni na sampajjanti. Tesu asampajjantesu paccayaḍḍakā bhikkhusaṃghassa paccaye dātuṃ na sakkonti, bhikkhū paccayehi kilamantā antevāsike saṃgaheṭuṃ na sakkonti. Gacchante gacchante kāle pariyatti parihāyati, atthavasena dhāretuṃ na sakkonti, pāḷivasen' eva dhārenti.

「教法」とは、三蔵たる仏語であり、註釈(アッタカター)を含むパーリである。それが存続する限り、教法は円満であると言われる。時が進み、カリ期において王たちが非法者になったとき、その非法者たちのうち王の取り巻きたちなどが非法者になり、それ以降、国土の住民が〔非法者になる〕。これらの者たちが非法者となることによって雨が正しく降らなくなり、それ以降、穀物が育たなくなる。それらが育たないあ

の隠没伝承では見られなかった「ジャータカ誦者」や「偈頌の隠没」などの興味深い記述が確認される。

ANA. i, 10, 33 (Vol. I pp. 88.14-89.25):

Tato gacchante gacchante kāle<sup>55)</sup> pālīm pi sakalaṃ dhāretuṃ na sak-konti, paṭhamam Abhidhammapiṭakaṃ parihāyati. Parihāyamānaṃ matthakato paṭṭhāya parihāyati. Paṭhamam eva hi Paṭṭhānamahāpakaraṇam<sup>56)</sup> parihāyati, tasmiṃ parihīne Yamakaṃ, Kathāvatthu, Pug-galapaññatti, Dhātukathā, Vibhaṅgo, Dhammasaṅgaho ti. Evaṃ Abhidhammapiṭake parihīne matthakato paṭṭhāya Suttantapiṭakaṃ parihāyati. Paṭhamam hi Aṅguttaranikāyo parihāyati, tasmim pi paṭhamam ekādasakanipāto, <sup>57)</sup> ...pe... tato ekakanipāto ti. Evaṃ Aṅguttare parihīne matthakato paṭṭhāya Saṃyuttanikāyo parihāyati. Paṭhamam hi mahāvaggo parihāyati, tato saḷāyatanavaggo, khandhavaggo, nidānavaggo, sagāthāvaggo ti. Evaṃ saṃyuttanikāye parihīne matthakato paṭṭhāya Majjhimanikāyo parihāyati. Paṭhamam hi uparipañāsako parihāyati, tato majjhimpañāsako, tato mūlapañāsako ti. Evaṃ Majjhimanikāye parihīne matthakato paṭṭhāya Dīghanikāyo parihāyati. Paṭhamam hi pāthikavaggo parihāyati, tato mahāvaggo, tato silakkhandhavaggo ti. Evaṃ Dīghanikāye parihīne Suttantapi-

---

いだ、生活必需品を施す者たちが比丘僧伽に生活必需品を施せなくなり、比丘たちは生活必需品に欠乏して、弟子たちにまで与えることが出来なくなる。時が進むにつれて、教法が断絶し、意義について保つことが出来なくなるが、パーリについてのみ保つ。

(1) PTS: kaliyugarājāno, VRI: rājayuvarājāno

(2) PTS: na devo sammā, VRI: devo na sammā

ANpT. i, 10, 33 (p. 127.5-6); ANT. (VRI: Vol. I p. 109.11):

**Atthavasenā** ti atṭhakathāvasena.

「意義について」とは「アッタカターについて」である。

55) PTS: kāle gacchante, VRI: gacchante gacchante kāle

56) PTS: Mahāpakaraṇam, VRI: Paṭṭhānamahāpakaraṇam

57) PTS: *omit* , VRI: *add* tato dasakanipāto



ṭakaṃ parihīnaṃ nāma hoti. Vinayapiṭakena saddhiṃ Jātakam eva dhārenti pi<sup>58)</sup>. Vinayapiṭakaṃ lajjino va dhārenti, lābhakāmā pana “suttante kathite pi sallakkhenta n’ atthi” ti Jātakam eva dhārenti. Gacchante gacchante kāle Jātakam pi dhāretuṃ na sakkonti. Atha tesam paṭhamam vessantarajātakam parihāyati, tato paṭilomakamena puṇṇakajātakam, mahānārada-jātakan ti pariyosāne apaṇṇakajātakam parihāyati. Evaṃ Jātake parihīne vinayapiṭakam eva dhārenti. Gacchante gacchante kāle tam<sup>59)</sup> pi matthakato paṭṭhāya parihāyati. Paṭhamam hi parivāro parihāyati, tato khandhako, bhikkhunivibhaṅgo, mahāvibhaṅgo ti anukkamena uposathakkhandhakamattam eva dhārenti. Tadā pi pariyatti antarahitā na hoti. Yāva pana manussesu catuppadikagāthā<sup>60)</sup> pi pavattati, tāva pariyatti anantarahitā va hoti. Yadā saddho pasanno rājā hatthikkhandhe suvaṇṇacaṇkoṭakamhi sahasatthavikaṃ ṭhapāpetvā “buddhehi kathitaṃ cātuppadikagātham jānanto imaṃ sahasam gaṇhatū” ti nagare bheriṃ carāpetvā gaṇhanakaṃ alabhitvā “ekavāraṃ carāpita nāma suṇantā pi honti asuṇantā pi” ti yāva tatiyaṃ carāpetvā gaṇhanakaṃ alabhitvā rājapurisā<sup>61)</sup> sahasatthavikaṃ puna rājakulaṃ pavesenti, tadā pariyatti antarahitā nāma hoti ti<sup>62)</sup>. Idaṃ pariyattiantaradhānaṃ nāma.

【阿毘達磨藏の隠没】それから時が進むにつれて、パーリ全体を保つことが出来なくなる。最初に阿毘達磨藏が失われる。失われる場合には端から失われる。最初に『発趣大論』が失われ、それが失われると『双論』『論事』『人施設論』『界論』『分別論』『法集論』が〔順に失われる〕。【経藏の隠没】このように阿毘達磨藏が失われると、端から経藏が失われる。最初に『増支部』が失われる。そのなかでも最初に第十一集が〔失われ〕…中

58) PTS: *add* pi, VRI: *omit*

59) PTS: *tam*, VRI: *vinayapiṭakam*

60) PTS: *catu-*, VRI: *cātu-*

61) PTS: *omit*, VRI: *add* tam

62) PTS: *-ti ti.*, VRI: *-ti.*

略…それから第一集が〔失われる〕。このように『増支〔部〕』が失われると、端から『相応部』が失われる。最初に大品が失われ、それから六処品、蘊品、因縁品、有偈品が〔失われる〕。このように『相応部』失われると、端から『中部』が失われる。最初に後分五十〔編〕が失われ、それから中分五十〔編が失われ〕、それから根本五十〔編が失われる〕。このように『中部』が失われると、端から『長部』が失われる。最初にパーティヤ品が失われ、それから大品が〔失われ〕、それから戒蘊品が〔失われる〕。このように『長部』が失われると、経蔵が失われたと言われる。【ジャータカの隠没】律蔵と共にまさに『ジャータカ』を保持する。恥を知る者は律蔵を保持するが、利得を欲する者は「経を語っても理解するものはいない」と『ジャータカ』だけを保持する。時が進むにつれて『ジャータカ』すらも保持できなくなる。その時、それら〔『ジャータカ』〕のなかで、最初に「ヴェッサンタラ・ジャータカ」が失われる。それから逆順に「ブンナカ・ジャータカ」、「大ナーラダガカッサパ・ジャータカ」が〔失われ〕、最後に「アパンナカ・ジャータカ」が失われる。このように『ジャータカ』が失われると、律蔵だけを保持する。【律蔵の隠没】時が進むにつれて、それ（律蔵）も端から失われる。最初に附随が失われ、それから犍度部、比丘尼分別、大分別が順に〔失われ〕、布薩部だけを保持する。その時でも教法は隠没しない。【偈頌の隠没】そして、人々のあいだに四句からなる偈が起こるあいだは、教法はまさに隠没しない。信仰を持ち淨信を抱く王が、象の肩に〔置いた〕黄金の小箱に千〔金〕の入った袋を入れて「諸仏が説いた四句からなる偈を知っている者に、この千〔金〕を与える」と都で太鼓を打って廻ったが授与者を獲られず、「一回目に廻った時には、〔私の話を〕聞いていた者もいたが、聞いていない者もいた」と、三度にわたり廻っても授与者を獲られないまま、王の家臣たちが〔その〕千金の入った袋を再び王の蔵に戻すときに、教法が隠没したと言われる。これが、「教法の隠没」と呼ばれる。

ここでは「経蔵（四部）→阿毘達磨蔵（七論）→ジャータカ→律蔵（附随→

犍度部→両分別→布薩部) →偈頌」の順で隠没が説かれている。上訳からもわかるように、隠没伝承(γ)だけに確認できる特徴として、1) 経蔵と律蔵の隠没のあいだに『ジャータカ』の隠没が挿入されること、2) 律蔵の隠没の後に「偈頌の隠没」が説かれること、の二点が確認される<sup>63)</sup>。続いてこの二点を検討することで、上座部における小部の扱いを考察していく。

### (a) ジャータカ誦者

まず、隠没伝承(γ)に含まれるジャータカ誦者への言及から考察する。先ほど検討した隠没伝承(γ)の内容によれば、四部(経蔵)が隠没した後には、律蔵を保持する「恥を知る者」と、『ジャータカ』を保持する「利得を欲する者」とが存在する。この「利得を欲する者」について、馬場紀寿[2008: p. 225 註16]は、「在家者からの寄付を期待する出家者」であると予想している。この指摘の妥当性を補強する記述が、『分別論註』におけるジャータカ誦者への言及から確認される。そこでは、ジャータカ誦者が在家者の部屋を家捜しして見つけた食べ物を布施するように要求し、その在家者から「坊主」(muṇḍaka)という侮蔑の言葉を浴びせられている。

VibhA. (p. 484.9-27):

Jātakabhāṇakavatthu c’ ettha kathetabbam. Eko kira jātakabhāṇakatto bhuñjitukāmo upaṭṭhāyikāya geham pavisitvā nisīdi. Sā adātukāmā “taṇḍulā n’ atthi” ti bhaṇanti taṇḍule āharitukāmā viya paṭivissakagharam gatā. Bhikkhu antogabbham pavisitvā olokeno kavāṭakoṇe ucchuṃ, bhājane guḷam, piṭake loṇamacchaphālām, kumbhiyam taṇḍule, ghaṭe ghaṭam disvā nikkhamitvā nisīdi. Gharanī “taṇḍulam nālattan” ti āgatā. Thero “upāsike, ajja bhikkhā na sampajjissati ti paṭikacc’ eva nimittam addasan” ti āha. “Kiṃ, bhante” ti? “Kavāṭakoṇe nikkhittam ucchuṃ viya sappam addasam; tam paharis-

63) またここでは、僧団ではなく在俗者たちのあいだに偈頌が残存しているかどうかが問題となっている点も興味深い事実である。

sāmī ti olokento bhājane ṭhapitaṃ guḷapiṇḍaṃ<sup>64)</sup> viya pāsāṇaṃ; leḍḍukena<sup>65)</sup> pahaṭena sappena kataṃ piṭake nikkhattaloṇamaccha-phālasadisāṃ phaṇaṃ; tassa taṃ leḍḍuṃ ḍasitukāmassa<sup>66)</sup> kumbhiyā taṇḍulasadise dante; ath’ assa kupitassa ghaṭe pakkhittaghatasadisāṃ mukhato nikkhamantaṃ visamissakaṃ kheḷaṇ” ti. Sā “na sakkā muṇḍakaṃ vañcetun” ti ucchuṃ datvā odanaṃ pacitvā ghataguḷamacchehi saddhiṃ adāsī ti.

ジャータカ誦者の事案がここで語られるべきである。伝え聞くに、一人のジャータカ誦者である長老が、食事をしたいと欲して奉仕者の家に入って坐った。〔食事を〕与えたくなかった女は「米がない」と語りながら、米を持って来ようとする振りをして、隣の家に行った。比丘は内部屋に入って家捜しをして、戸の隅に甘蔗を、器の中に砂糖を、籠の中に塩漬けの魚を、瓶の中に米を、壺の中に酥を見つけ、戻って〔再び〕坐した。主婦が「米は得られませんでした」と〔言って〕帰ってきた。長老は「優婆夷よ、今日、乞食はうまくいかないだろうという前兆を見ました」と言った。

〔主婦は〕「尊師よ、どのようなものでしょうか」〔と言った。〕「戸の隅に置かれた甘蔗のような蛇を見ました。“それを打撃してやろう”と眺めると、器の中に置かれた砂糖の塊のような石を〔見ました〕<sup>67)</sup>。〔その〕塊にて打撃された蛇が、籠の中に置かれた塩漬け魚のように、鎌首をもたげるのを〔見ました〕。その塊を噛もうとするそれ（蛇）の歯が、瓶の中の米のようであるのを〔見ました〕。そして、この怒った〔蛇〕の口から出た毒の混じた唾液が、壺の中に入れられた酥のようであるのを〔見ました〕」と。彼女は「坊主を欺くことは出来ない」と甘蔗を与え、米飯を炊き、酥・砂糖・魚を添えて〔比丘に〕与えた。

これと同文が『清浄道論』では「詭詐」（kuhanā）を戒める箇所説かれる

64) PTS: guḷapiṇḍe, VRI: guḷapiṇḍaṃ

65) PTS: pāsāṇaleḍḍuke, VRI: pāsāṇaṃ leḍḍukena

66) PTS: ḍasitu-, VRI: ḍapsitu-

67) VibhA. の PTS 版では意味が通じない。VRI 版の読みを取る。

ことから<sup>68)</sup>、上記でのジャータカ誦者による行いは上座部において非難されるべきものである。この他にも、ジャータカ誦者が非難される記述が確認される。また『中部註』では仏在世時にいたジャータカ誦者について次のように説かれている。

MNA. 38 (Vol. II p. 305.5-19):

So ca bhikkhu bahussuto, ayaṃ appassuto, jātakabhāṇako bhagavantam jātakam kathetvā, “ahaṃ, bhikkhave, tena samayena Ves-santaro ahoṣiṃ, Mahosadho, Vidhurapaṇḍito, Senakapaṇḍito, Mahājanako rājā ahoṣin” ti samodhānentam suṇāti. Ath’ assa etad ahoṣi – “ime rūpavedanāsaññāsāṅkhārā tattha tatth’ eva nirujjhanti, viññāṇam pana idhalokato paralokam, paralokato idhalokam<sup>69)</sup> sandhāvati saṃsarati” ti sassatadassanam uppannam. Ten’ āha – “tad ev’ idam viññāṇam sandhāvati saṃsarati anaññan” ti. Sammāsambuddhena pana, “viññāṇam paccayasambhavam, sati paccaye uppajjati, vinā paccayam n’ atthi viññāṇassa sambhavo” ti vuttam. Tasmā ayaṃ bhikkhu buddhena akathitam katheti, jinacakke pahāram deti, vesārajjañāṇam paṭibāhati, sotukāmaṃ janam viṣaṃvādeti, ariyapathe tiriyaṃ nipatitvā<sup>70)</sup> mahājanassa ahitāya dukkhāya paṭipanno.

かの比丘（アリッタ比丘）は多聞であるが、この者（サーティ比丘）は無聞のジャータカ誦者であり、世尊がジャータカを語り「比丘らよ、そのとき私はヴェッサンタラであった。マホーサダであった。ヴィドゥラ師であった。セーナカ師であった。マハージャナカ王であった」と〔過去と現在を〕連結させるのを聞いた。そのとき次のように思った。「これらの色・受・想・行は、まさにその場その場において滅する。けれども、識は今世から次世へ、次世から今世へ流転し、輪廻する」と、常見が生じた。それ

68) Vis. (pp. 28.16-29.2)

69) PTS: idhalokam, VRI: imaṃ lokam

70) PTS: patitvā, VRI: nipatitvā

ゆえに「この識は流転し、輪廻し、不変である」と語ったのである。しかし正等覚者によって「識は縁より生起する。縁があれば生じ、縁なしに識が生起することはない」と説かれている<sup>71)</sup>。従ってこの比丘は、仏陀によって語られていないことを語り、勝者の輪に打撃を与え、無畏の智を否定し、聞こうと欲する人々を騙し、聖なる路の傍らに倒れて大衆の不利益のため苦のために実践している。

すなわち、サーティ比丘は、ジャータカを誦しているのにもかかわらず無聞であり、常見が生じており、勝者の輪に打撃を与えているとまで説かれている。ところが、註釈元である『中部』第38経「大愛尽経」のなかに、このサーティ比丘がジャータカを誦していたことを示す記述は見当たらない。このような比丘をジャータカ誦者と重ねて理解していることから、上座部註釈家が、ジャータカ誦者を軽視していたことが窺える。これを裏付けるように、ブツダゴースヤやダンマパーラなどに帰せられる、比較的成立の早い上座部註釈文献中には、このジャータカ誦者 (Jātakabhāṇaka) の語が、上記二例を含めた八箇所に見られるが、そのなかでジャータカ誦者を褒め称える記述は存在しない<sup>72)</sup>。

71) 逐語的に一致する経典は存在しないようである。趣旨を要約したうえでの引用であると考えられる。

72) この八箇所の概要を表に纏めれば次のようになる。

資料	概要
① VinA. (Vol. IV p. 789.20-23)	ジャータカ誦者は、『ジャータカ』を学習し、附随的に『ダンマパダ』も学ぶ。
② MNA. 38 (Vol. II p. 305.5-19)	あるジャータカ誦者は、無聞であり、常見が生じており、勝者の輪に打撃を与えている
③ ANA. iii, 42 (Vol. II p. 249.3-17)	大ジャータカ誦者のもとに若い比丘が法話を聞きに行き、一日目は徒労に終わってしまったが、二日目には預流果を得た。
④ SnA. 137-139 (Vol. I p. 186.30)	誦者間の読みの違いを示す。
⑤ KhpA. (p. 151.12); SnA. 269 (Vol. I p. 300) * 省略	ジャータカ誦者は、『ジャータカ』を読誦する。
⑥ CpA. (p. 154.18-19)	誦者間の読みの違いを示す。
⑦ VibhA. (p. 484.9-27)	あるジャータカ誦者が在家宅を家捜しして、見つけた食料の布施を求める。
⑧ Mhv. 35, 30	王が、マハーパドゥマという名前のジャータカ誦者から説法を聞いて信心を起こした。

そして、これまでの先行研究によって、1) 上座部文献のうちに四部の誦者 (bhāṇaka) が登場するのに対して、小部については『ジャータカ』と『ダンマパダ』の誦者だけが確認されること、2) 『ダンマパダ』は『ジャータカ』の附随的文献として説かれること、という二点が明らかになっている<sup>73)</sup>。このことから、『ジャータカ』は小部を代表する最も流布していた文献の一つであったと考えられるが、そのジャータカ誦者が上座部文献において否定的に評価

このうちの四箇所 (①④⑤⑥⑧) はジャータカ誦者そのものを評価するような内容ではなく、『ジャータカ』を読む者がジャータカ誦者であるという単なる説明や (①⑤)、誦者間にある異読 (④⑥)、そして史書において名前だけ言及される人物に過ぎない (⑧)。そして資料③も、ジャータカ誦者を褒め称える内容ではない。

ANA. iii, 42 (Vol. II p. 249.3-17):

Dighavāpiyam pi “mahājātakabhāṇakathero gāthāsahassaṃ mahāvessantaraṃ kathessati” ti mahāgāme<sup>(1)</sup> tissamahāvihāravāsiko<sup>(2)</sup> daharo sutvā tato nikkhamitvā ekāhen’ eva navayojanamaggaṃ āgato. Tasmim yeva khape therodhammakathaṃ ārabhi. Daharo dūramaggāgamanena sañjātakāyadarathattā patṭhānagāthāya saddhim avasānagāthaṃ yeva vavatthapesi. Tato therassa “idam avocā” ti vatvā utṭhāya gamanakāle “mayhaṃ āgamanakammaṃ moghaṃ jātan” ti rodamāno aṭṭhāsi. Eko manusso tassa<sup>(3)</sup> kathaṃ sutvā gantvā therassa ārocesi, “bhante, ‘tumahākaṃ dhammakathaṃ sossāmi’ ti eko daharabhi-kkhu tissamahāvihārā āgato, so ‘kāyadarathabhāvena me āgamaṇaṃ moghaṃ jātan’ ti rodamāno ṭhito” ti. “Gacchatha saññāpetha naṃ<sup>(4)</sup> puna sve kathessāmā” ti. So punadivase therassa dhammakathaṃ sutvā sotāpattiphalaṃ pāpuṇi.

ディーガヴァーピにおいても「大ジャータカ誦者が千の偈頌からなる大ヴェッサンタラを語るだろう」と〔ティッサ〕<sup>(5)</sup>大村落にあるティッサ大僧院にいる若者が聞いて、それから出発して一日かけて九ヨーjanaの道程をやって来た。ちょうどその時、長老が法話を始めた。若者は遠い道程ゆえに生じた身体の患悩から、最初の偈と最後の偈だけを確定した。それから〔その若い比丘は〕、長老が「これを説きました」と言う〔のを聞いてから〕立ち上がり、歩くときに「私の到着は虚しいことだった」と叫びつづいた。一人の男が、彼の話聞いて、行き、長老に告げた。「尊師よ、“あなたの法話を聞きたいです”とティッサ大僧院にいる一人の若い比丘がやってきました。彼は、“体が疲れていたんで、私の到着は虚しいことだった”と叫びつづきました」と。〔長老は言った〕「〔彼のものとに〕行って伝えなさい。明日、それを再び語りましょう」と。翌日に彼は長老の法話を聞いて預流果を得た。

(1) PTS: mahāgāme, VRI: tissamahāgāme

(2) PTS: -vāsiko, VRI: -vāsī eko

(3) PTS: tassa, VRI: taṃ

(4) PTS: omit, VRI: add ti

(5) VRI により補う。

73) Adikaram, E.W. [1946 : pp. 24-32]、森祖道 [1984 : pp. 274-282]、Norman, K.R. [4 : pp. 97.3-98.29] [1997 : p. 44.17-26]



されており、その他の小部諸経については誦者や伝持者の存在すらも殆ど知られないという事実は、上座部内における小部への評価そのものが、その名が示すように、四部に対して雑余のものに過ぎなかったことを示唆している。

### (b) 偈頌の隠没

続いて隠没伝承( $\gamma$ )の最後に挿入されている「偈頌の隠没」について考察する。上座部では「教法(三蔵)の隠没」を説くなかで上座部三蔵の構成内容に言及している。この隠没伝承( $\gamma$ )では「阿毘達磨蔵→四部(経蔵)→ジャータカ→律蔵(附随→犍度部→比丘尼分別→比丘分別→布薩部)→偈頌」いう順序で「教法(三蔵)の隠没」が説かれている。すなわち、偈頌が隠没する前に、阿毘達磨蔵・四部(経蔵)・律蔵は既に隠没してしまっているのであるから、ここでの「偈頌」とは三蔵に含まれ、かつ阿毘達磨蔵・四部(経蔵)・律蔵以外に属するもの、すなわち現行の小部に収められる偈頌を強く意識していたと考えられる<sup>74)</sup>。これを裏付けるようにダンマパーラ著『増支部復註』(ANpT.)では、この「偈頌」が小部に収められる偈頌と絡んで次のように註釈されている。

ANpT. (p. 127.8-9) ; ANT. (VRI: Vol. I p. 109.12-13):

Āḷavakapañhādinaṃ viya deveṣu pariyattiyā pavatti appamāṇaṃ ti āha  
- “manussesū” ti.

「アーラヴァカの質問」などのように、諸天のあいだに教法が僅かな量存続していたので「人々のあいだに」と言われている。

この註釈を理解するためには、先ほど検討した隠没伝承( $\beta$ )も参照する必要がある。すなわち、カッサパ仏の時代には、いくつかの偈頌が天界に残ってい

74) この隠没伝承( $\gamma$ )において、律蔵のなかで最後まで存続している布薩部においても偈頌が含まれるが、それは摂偈(uddāna)に過ぎない。したがって「偈頌の隠没」において問題となっている偈頌ではありえない。なぜならこの隠没伝承では、「仏陀によって説かれた偈頌」が問題となっているからである。

たのにもかかわらず教法が隠没してしまったという伝承である。これらの事情を勘案すると、阿毘達磨藏・四部（経藏）・律藏が忘却された後にも、小部に含まれる偈頌は人々の間に残り、それが忘れ去られることで教法が隠没することになる。しかし、たとえ天界にいくつかの偈頌が残っていたとしても、それだけでは仏陀の残した教法を存続させることは出来ない。

#### 第四項 隠没伝承のまとめ

上座部に伝わる三つの隠没伝承を考察した結果、「阿毘達磨藏→四部（経藏）→律藏」の順で教法が隠没するという骨子は一致しているが、小部の扱いについては一貫していないことが明らかとなった。これら隠没伝承において、三藏に含まれ、かつ律藏・四部（経藏）・阿毘達磨藏に含められない資料として『ジャータカ』と「偈頌」が言及され、これらは小部に相当すると考えられるが、それらの扱いはその他の律藏・四部（経藏）・阿毘達磨藏と比較して軽視されている。このような小部の事情は、ジャータカ誦者は在家者に布施を要求する恥知らずであると評価されたり、少数の偈頌が残っていても仏教の教えを維持することが出来ないと評価されることから裏付けられる。そして有部においても上座部と同様の傾向が確認される。有部における正法滅尽においても三藏の存続／消滅が問題となっているが、「小（雑）藏／阿含」は三藏の外側に置かれる解釈が存在するため、それが正法を維持するための体として十分に周知されていたわけではない。このように両部派において、「小部」あるいは「小（雑）藏／阿含」の権威性は低かったと考えられる。

また、既に多くの研究によって、上座部においても、もともと経藏は四部構成であったが、後に小部が加えられ五部になったことが指摘されている<sup>75)</sup>。さらに、この小部は最初から現行の十五書によって構成されていたわけではなく、

75) 前田恵學 [別 1 (= 1964) : pp. 681-787]、森祖道 [1984 : pp. 274-282]、馬場紀寿 [2008 : pp. 155-253]などを参照。これについては、諸部派に律藏に残される第一結集の記録において、「小（雑）藏／阿含／部」に相当する典籍の扱いには一貫性が見られないのに対して、経藏に「長」「中」「相応」「増支」の四種が含まれることは共通していることも根拠になる。また上座部資料中についても、経藏が四部構成だった痕跡が残されている。上座部所伝の Dv. 4, 15に残される第一結集では、四部だけが「法」として合誦され、そこに小部が言及されていない。

当初は『ジャータカ』や『ダンマパダ』などの偈頌經典によって構成され、徐々に時代と共に新しい資料が小部に加えられていったことが明らかになっている<sup>76)</sup>。そして、これら「偈頌」による仏法の流布が、初期經典や律藏において戒められていたことは、これまでの本稿の議論を考察する上で極めて示唆的である<sup>77)</sup>。

以上の事情を勘案すると、教法の隠没伝承の原型には小部に関係する記述はなく、この小部が上座部内で第五部としての地位を確立する過程で、隠没伝承に『ジャータカ』や「偈頌」に関する増補がなされたと想定される。そして、小部を構成する諸資料の内容は長らく定まっておらず、他の三藏と比して相対的に権威性が低く見られていたゆえに、隠没伝承における小部の位置付けが定まらなかったものと考えられる。

## 結論

以上、第一節と第二節において、本稿では上座部註釈文献に残されている結集伝承と、隠没伝承とにおける小部の扱いについて考察し、以下の点が確認された。

- (1) 結集伝承において起こる「大地の震動」は、賛辞 (sādhukāra) と同義に理解され、合誦された聖典の正統性と権威性を保証する上で重要な役割を担っている。ところが、この「大地の震動」は、律藏・四部(経藏)・阿毘達磨藏の合誦に対して起こるのに対して、現行の小部にあたる小書の合誦に対しては起こらない。
- (2) 教法(三藏)の隠没伝承においては、隠没の対象として小部がまとまって説かれることはないが、現行の小部と関係する「ジャータカの隠没」や「偈頌の隠没」が説かれている<sup>78)</sup>。またそこでは、ジャータカ

76) 前田恵學 [別 1 (= 1964) : pp. 773.1-774.17]、森祖道 [1984 : pp. 274-282] を参照。馬場紀寿 [2008 : pp. 177.14-178.4] は、藏外に十五書(もしくは『クツガカバータ』を除いた十四書)が徐々に蓄積されてゆき、この十五書が一度に「小部」として編纂されたと主張している(馬場説の是非については後に扱う)。

77) SN. 20, 7 (Vol. II pp. 266.25-267.25)、AN. ii, 5, 6 (Vol. I pp. 72.24-73.23)、AN. v, 79 (Vol. III p. 107.11-24)、Vin. (Vol. II p. 139.1-16)

78) 隠没伝承(β)では、四部(経藏)の隠没に続いて、小部を意識した「偈頌が少量残って

誦者が布施を求める恥知らずであると言及されたり、偈頌が幾つか残っていても教法を維持することは出来ないと言及されたりするなど、その他の律蔵・四部（経蔵）・阿毘達磨蔵と比べ、それら『ジャータカ』や「偈頌」は軽視されている<sup>79)</sup>。これと同一の傾向が、有部の

いても教えを保つことが出来ない」という下りが差し込まれる。最も充実した内容を示す隠没伝承(γ)では、四部（経蔵）と律蔵の隠没の間に「ジャータカの隠没」が説かれ、さらに律蔵の隠没に続いて「偈頌の隠没」が説かれる。この隠没伝承(β)において言及される「偈頌」と、隠没伝承(γ)において言及される『ジャータカ』および「偈頌」とは、いずれも、阿毘達磨蔵・四部（経蔵）・律蔵の外にあり、かつ三蔵に含まれるものでなければならぬから、これらの記述は小部に含まれる偈頌經典を意識している。

- 79) 初期仏教において偈頌の権威性が高くなかった点は、本稿の「問題の所在」において既に述べた。またこの傾向は、上座部註釈文献における結集・隠没の伝承以外の角度からも確認することが出来る。それは、パーリ律波逸提法第四条〈未受具戒人同誦戒〉に対する註釈である。この条項は、具足戒を受けていない者に対して、比丘が法（dhamma）を同誦させてはならないという規則である（仔細については平川彰 [16: pp. 92.14-104.5] を参照）。ブッダゴサ註（VinA.）では、三度の結集において収載されたものがこの法（dhamma）に該当すると説明するが、偈頌に結ばれたものであれば不犯であるという。

VinA. (Vol. IV pp. 742.21-29):

Kiñcāpi vivaṭṭūpanissitaṃ vadati, tisso saṅgītiyo āruḥhadhammaṃ yeva pana padaso vācentassa āpatti. Vivaṭṭūpanissite pi nānābhāsāvasena gāthāsīloka-bandhādhihi abhisāṅkhate anāpatti. Tisso saṅgītiyo anāruḥhe pi kulumbasuttaṃ rājovādasuttaṃ tikkhindriyaṃ catuparivaṭṭaṃ nandopanandan ti idise āpatti yeva. Apalāladamanam pi vuttaṃ, mahāpaccariyaṃ pana paṭisiddhaṃ. Meṇḍakamilindapañhesu therassa sakapaṭibhāne anāpatti, yaṃ rañño saññāpanatthaṃ āharitvā vuttaṃ, tattha āpatti.

如何なるものであれ脱輪廻の拠所となるものを説いて、三度の合誦のあいだに収載された法を句ごとに詠誦させる者には犯戒がある。脱輪廻の拠所となるものであっても、様々な言説をもって偈頌や詩句に結ばれることで装飾されていれば不犯である。三度の合誦のあいだに収載されていなくとも、『クルンバ経』『諫王経』『鋭根』『四章』『難陀優婆塞難陀』というこれらについて〔句ごとに詠誦させる者には〕まさに犯戒がある。『アパララの調伏』も〔このなかに〕説かれるが、『マハーパッチャリー』では否定されている。ミリンダ〔王〕の難問のうち、長老の自己の弁才については〔句ごとに詠誦させても〕不犯であるが、王を説得するため引用して説かれたことを〔句ごとに詠誦させる者には〕犯戒がある。

たとえ三度の結集で収載されていない『クルンバ経』などの謂わば外典であっても法（dhamma）として認められ、それを共に誦誦することは犯戒であると述べられている。また一方、同じく外典の典籍である『ミリンダ王の問い』の場合には、長老が自身の見解を述べている箇所を共に誦誦することは不犯であるという。これらを総合すると、三蔵に含まれる偈頌は、たとえ三度の結集において収載されたと伝承されていても、その他の散文を中心とした法（dhamma）とは異なった扱いを受けていたことが確認される。さらにここでは、在家との唱和が許されていることから、これら偈頌が、「誦誦經典」としてより在俗的・通俗的なものとして見做されていたと予想される。誦誦經典については Lévi, S. [1915]、石上善応 [1956] [1968]、南清隆 [1984]などを参照。

「正法の隠没」における「雑（小）藏／阿含」への扱いからも確認される。

以上の結集・隠没の両伝承からも明らかのように、上座部において小部を構成する諸聖典は、その他の三藏を構成している諸聖典と比して劣った扱いを受けている。

その理由は、初期仏教において詩的作品には権威性が認められていなかったため、これら詩的作品を中心とした雑余の典籍が「小部」として集成されたのが遅れたこと、そしてこの「小部」という範疇が成立した後も、その構成内容や三藏内での位置付けが長く定まらなかったことに由来するだろう<sup>80)</sup>。このために上座部における小部は、経藏の第五部として三藏のうちに含まれていながらも、律藏・四部（経藏）・阿毘達磨藏と比して重要な地位を確立し得なかったと考えられる。

## 第二章 小部の成立と受容

つづいて本章では、上座部において「小部」がどのように成立し、受容されていったのかについて考察する。前章において、上座部註釈文献に残される結

---

80) 渡辺文麿 [1979] が指摘するす次のパーリ律の一文は、偈頌と小部の関係性を考える上で重要な情報を提示している。

Vin. (Vol. IV p. 144.3-5):

Anāpatti na vivapaṇṇetukāmo “iṅgha tvaṃ suttante vā gāthāyo vā abhidhammaṃ vā pariyāpuṇassu, pacchā vinayaṃ pariyāpuṇissasi” ti bhaṇāti, ummattakassa, ādikammikassā ti.

誹謗しようとするのではなく「さあ、あなたは経 (suttanta)、あるいは偈頌 (gāthā) を、あるいは阿毘達磨 (abhidhamma) を学習しなさい。その後で律 (vinaya) を学習しなさい」と言うもの、狂者、最初の犯行者は不犯である。

ここでは、経 (suttanta)、偈頌 (gāthā)、阿毘達磨 (abhidhamma)、律 (vinaya) という四要素が学習の対象になっている。さらに偈頌を除いて、経・阿毘達磨・律は、それぞれ三藏として独立したものである。このような記述からも、当初の仏教教団において詩的作品がその他の三藏四部と比して異なった扱いを受けていた点が確認される。おそらく、ここで言及される「偈頌」とは、小部として纏められる以前の『ジャータカ』などの詩的作品群を指していたと考えられる。

集と隠没の両伝承を考察し、結論として、結集や隠没において小部が他の三蔵四部と異なる扱いを受けている理由は、その権威の低さを反映している点を明らかにした。もしこの結論を受け入れるならば、結集伝承において「大地の震動」が小部（小書）に対して起きていないことや、隠没伝承において小部組織への言及がないことは、四部から五部へ再編される以前の三蔵のあり方を構想する根拠にはならない。なにより、隠没伝承においても、三蔵に含まれながらも四部の外にある『ジャータカ』や「偈頌」が言及されており、既に三蔵のうちに小部が存在していたことを示唆している。

ここで問題となるのは、結集と隠没の両伝承を主材料として小部の形成史を考察した馬場紀寿〔2008：pp. 155-253〕と、本研究との整合性である。この馬場紀寿による研究は、これら結集や隠没の伝承における小部の扱いを形成過程に還元しながら、小部が経蔵に含められるまでを次の五段階に分ける<sup>81)</sup>。

- (A) 旧三蔵の成立：律蔵（経分別・犍度部・附随）、経蔵（四部）、論蔵（七論）
- (B) 旧三蔵の外側に『ジャータカ』が蔵外文献として追加される。
- (C) 旧三蔵の外側に“経とは呼ばれない仏陀の言葉”と呼ばれる十二書（ジャータカ・無礙解道・義釈・スッタニパータ・ダンマパダ・ウダーナ・イティヴッタカ・天宮事・餓鬼事・長老偈・長老尼偈・アパダーナ）が蔵外文献<sup>82)</sup>として追加される。
- (D) 三蔵外から三蔵内への編入。上記のうち十一書（アパダーナを除く）が小書（Khuddaka-gantha）と呼ばれ、長部誦者は阿毘達磨蔵へ収載し、中部誦者はこの十一書に『アパダーナ』『ブッダヴァンサ』『チャリヤーピタカ』を加えた十四書を経蔵へ収載した。
- (E) 新三蔵の成立。上の十四書に『クッダカパータ』が追加され、小部十五書が現在の形に定着した。そしてこの段階で小部（Khuddaka-

81) この要約は、森祖道〔2008a: pp. 285.24-286.6〕を基にしている。

82) 馬場紀寿〔2008：p. 167.1-4〕

nikāya) という名称が用いられるようになった<sup>83)</sup>。この小部の名称は、段階(D)において十四書が揃ってから十五書が纏められるまでの間である。

この仮説のうち重要な点は、1) ブッダゴーサが登場したときには、経蔵を四部とする古資料と、これに小部を加えて五部とする古資料との二種があり、基本的に古資料は経蔵を四部としていたこと<sup>84)</sup>、2) ところが、ブッダゴーサは自身の思想的根拠を三蔵内に含める必要があったために、五部という範疇を採用して現在の形に三蔵を再編した、という二点である<sup>85)</sup>。この各段階における経蔵の四部／五部の別と、その根拠となっている資料を表に纏めると次のようになる。

段階	根拠	経蔵の構成		
		四部構成	四部五部混成	五部構成
(A)	隠没伝承( $\beta$ )	○		
(B)	隠没伝承( $\gamma$ )	○		
(C)	隠没伝承( $\alpha$ )、四大教法註	○		
(D)	第一結集伝承		○ <sup>86)</sup>	
(E)	仏語の分類			○

83) なお馬場紀寿 [2008 : p. 192.13-14, p. 193.15-194.1] は、ブッダゴーサによる小部の名称理解について「彼にとって、狭義の「小部」(クッダカニカーヤ)は『小謡』(クッダカパータ)を冒頭とする集成(ニカーヤ)なのである」と仮説を述べている。しかし、少なくとも上座部の伝統においては、そのように理解されていないようである。それは奇しくも『クッダカパータ註』自身が次のように語っていることから確認される。

KhpA. (p. 12.12-14):

Kasmā pan' esa khuddakanikāyo ti vuccati? Bahunnaṃ khuddakānaṃ dhammakhandhānaṃ samūhato nivāsato ca.

【問】また、何故にこれは小部と呼ばれるのか。【答】種々雑多な法蘊(bahunnaṃ khuddakānaṃ dhammakhandhānaṃ)が収載され、置かれているからである。

84) 馬場紀寿 [2008 : p. 194.3-8]

85) 馬場紀寿 [2008 : pp. 184.15-186.4]

86) 馬場紀寿 [2008 : pp. 165.5-170.13, pp. 175-179, pp. 212.16-213.5]によれば、段階(C)において『ジャータカ』など十二書は三蔵外に位置付けられており、段階(D)では当初は四部構成だった結集伝承にブッダゴーサが『ジャータカ』など十四書を「小書」(Khuddaka-gantha)として加え、段階(E)において『クッダカパータ』を加えた十五



従ってこの五段階説に従えば、段階(A)(B)(C)では経蔵四部構成の旧三蔵を示しており、段階(D)でようやく小部に相当する経典が三蔵に入れられたことになる。しかしながら、第一章において述べたように、この五段階説の根拠とされる諸資料は、三蔵の発達段階を反映したものであるとは言い難く、より慎重な資料の吟味が必要である。そこで、まず第一節において、馬場紀寿によって提示された五段階説の根拠を再検討して、そこに説かれる経蔵が四部であるか五部であるかを考察する。

## 第一節 小部成立の五段階説に関する問題点

### 第一項 段階(A)(B)における隠没伝承

まず、段階(A)(B)において根拠とされる隠没伝承( $\beta$ )( $\gamma$ )と小部の関係について考察を加える。馬場紀寿[2008: pp. 162.12-165.4]は、このうち資料( $\gamma$ )にある「ジャータカの隠没」を小部形成の萌芽として取り上げているが、一方で、この両資料の中で言及される「偈頌」には全く触れていない。ここでの「偈頌」は、律蔵・四部(経蔵)・阿毘達磨蔵の外側に置かれていることから、偈頌典籍を大量に含む小部を明らかに意識していると考えられる<sup>87)</sup>。

また、隠没伝承において小部を体系的に言及していないことが、そのまま小部が存在しなかったことの証明になるわけではない。なぜなら、隠没伝承( $\beta$ )では「幾つかの偈頌が残っていても教法を維持することが出来ない」と説かれているからには、韻文資料を中心としている小部は教法を維持する必須要素と目されなかったために隠没記事において体系的に言及されなかったと考えられるからである。もし小部がここでの必須要素であったならば、未言及は明らかに不備であるから、その後の復註が何らかの補足をしていて然りであるが全く無言のままである<sup>88)</sup>。そして、説一切有部においても「小(雑)蔵／阿含」が

書が小部(Khuddaka-nikāya)として初めて纏め上げた、とされる。

87) 本稿第一章二節「隠没伝承における小部の痕跡」を参照。

88) 復註を著したダンマパーラは、不備があると判断した箇所については補足を入れている。たとえば、ブッダゴーサは「四大教法註」において小部のうち十二書しか言及していないが、本来ならば小部全書が列挙されていなければならない箇所である。この部分に対してダンマパーラは、この不備を是正しようとしている。仔細については本稿第二章三節二項「「四大教法註」に対するダンマパーラ復註」を参照。

正法の体として周知されていなかったことは、この仮説の傍証になろう<sup>89)</sup>。

さらに、上座部文献中には、律蔵・四部（経蔵）・阿毘達磨蔵の誦者や伝持者が度々登場するのに対して、小部の誦者や伝持者が言及されることは極めて稀であり、例外的にジャータカ誦者だけは古い時代から存在していたことが確認されている<sup>90)</sup>。この事情こそが、隠没伝承(γ)において、小部のうち「ジャータカの隠没」だけが独立して説かれている事由であると理解し得る。

このように、隠没伝承のうちに小部が体系的に説かれていないことは、小部に対する聖典観やその流布状況を反映した結果であると考えられ、小部が存在しなかったことを直接的に証明しているわけではない。

さらに馬場紀寿 [2008 : p. 172.12-14, p. 177.4-13] は、隠没伝承(γ)において『ジャータカ』が三蔵外に置かれていると理解しているが、これにも再考の余地がある。なぜなら「教法の隠没」における教法 (pariyatti) とは三蔵であると理解されているから、隠没する対象になっている『ジャータカ』も三蔵に属していなければならない。従ってここでの『ジャータカ』とは、三蔵に含まれながらも、律蔵・四部（経蔵）・阿毘達磨蔵の外側に置かれていることになるから、やはり小部が意識されていると考えることが穏当である。これと同一の理解は、隠没伝承(β) (γ)において言及される「偈頌」にもあてはまる。

以上より、馬場紀寿が示す段階(A)(B)は、律蔵（経分別・犍度部・附随）、経蔵（四部）、論蔵（七論）によって構成された「旧三蔵」を示しているとは必ずしも主張できないであろう。

## 第二項 段階(C)における「四大教法註」

段階(C)の根拠として馬場紀寿 [2008 : pp. 165.5-167.4] は、隠没伝承(α)に加え、四大教法に対するブッダゴーサ註を援用している<sup>91)</sup>。しかしなが

89) 本稿第一章「結集伝承と隠没伝承における小部」の冒頭部を参照。

90) Adikaram, E.W. [1946 : pp. 24-32]、森祖道 [1984 : pp. 274-282]、Norman, K.R. [4 : pp. 97.3-98.29] [1997 : p. 44.17-26]

91) DNA. (Vol. II p. 566.2-6)

らこの両資料は、異なる関心のもとに述べられているものであるから、これを結び付けて同一段階に置くためにはさらなる検討が必要であろう。なにより、隠没伝承( $\alpha$ )は、増広の度合いからして、段階(A)(B)の根拠とされている隠没伝承( $\beta$ )( $\gamma$ )よりも前段階に置くことが穏当である<sup>92)</sup>。

そして四大教法に対するブッダゴーサ註に挙げられる、『ジャータカ』など十二書の扱いについても再検討が必要である。ここで根拠として引用されている箇所は、「経と律」の定義が五つ挙げられ<sup>93)</sup>、そのうち第四説にある問題点をブッダゴーサが指摘している部分である。すなわち「経＝経蔵・阿毘達磨蔵、律＝律蔵」という解釈を採用する場合には、“経とは呼ばれない仏陀の言葉”と呼ばれる『ジャータカ』など十二書が、三蔵に含まれないことになってしまう、というのである。この部分の理解について馬場紀寿〔2008：pp. 166.11-167.4〕は、この『ジャータカ』など十二書が三蔵の外部に位置付けられていると結論する。しかし、このブッダゴーサによる指摘は、これら十二書が三蔵に含まれていることを前提にしていると読める。すなわち、「経＝経蔵・阿毘達磨蔵」と定義してしまうと上記の十二書が漏れてしまい、この「経と律」のうちに三蔵すべてが入らないという問題点を、ブッダゴーサは指摘しているのである<sup>94)</sup>。もしもこれら十二書が三蔵外文献であると見做されていたならば、ここに言及されない筈である。従ってこの第四説に対するブッダゴーサの指摘から、まさに上記の十二書が上座部三蔵に収められている点を確認される。

また、上記の第四説から「経蔵四部構成の旧三蔵に言及している」という理解を導き出すことにも若干の疑義がある<sup>95)</sup>。もし、この第四説に対するブッダ

92) 浪花宣明〔1998：pp. 85-87 註1〕

93) 馬場紀寿〔2008：p. 166.11-13〕は、引用する箇所について「法と律」を定義していると本文中で述べているが、訳文から明らかなように、正確には「経と律」を定義する箇所である。この「経と律」とは、新しく提示された説の是非を決定する判定基準のことであり「法と律」と同一ではない。

94) 加えて指摘するならば、“経とは呼ばれない仏陀の言葉”における「経」とは、「経と律」という字句における「経」を意味しているのであって、「経蔵」を意味しているのではない。なぜなら、ここでの「経」は、この第四説「経＝経蔵・阿毘達磨蔵」という定義への反論において用いられており、さらに、第五説においてブッダゴーサは“経とは呼ばれない仏陀の言葉”は存在しないと主張して「経＝三蔵（仏陀の言葉）」という定義を主張するからである。DN. 16 (Vol. II p. 124.3-19)を参照。

95) 馬場紀寿〔2008：p. 187.14-19〕

ゴーサの言及から「第四説という古資料の段階では『ジャータカ』など十二書が三蔵外に置かれ、経蔵は四部構成である」と解釈し得るのであれば、第三説において提示される「経＝経蔵、律＝律蔵」という定義の場合には阿毘達磨蔵が三蔵(?)に含まれないという古資料が存在することになってしまい、第一説にいたっては経分別と犍度部だけが三蔵(?)に含まれる古資料が存在することに陥ってしまう。無論、そのような理解は成り立たない。ここでは、第一説から第四説までの諸解釈では三蔵すべてが収まり切らないという点が問題視されているのであり、旧三蔵が新三蔵に基づいて批判されているわけではない。このブッダゴーサ註から読み取れる事実は、ここに言及されていない『クツダカパータ』『ブッダヴァンサ』『チャリヤーピタカ』の三書が三蔵から外れていた可能性であり<sup>96)</sup>、そこから経蔵が四部構成であることを導き出すことは出来ない。

以上の諸考察から、段階(C)も旧三蔵を示しているとは言い難い。

### 第三項 段階(D)における「第一結集伝承」

段階(D)の根拠として提示される資料は、本稿第一章において検討した「第一結集伝承」である。馬場紀寿[2008: pp. 212.16-213.5]の理解によれば、現在『長部註』に残っている第一結集の記事は、もともと経蔵四部構成(旧三蔵)であったものに、ブッダゴーサが自身の見解を反映させるために小部(小書<sup>97)</sup>)に関する記事を付け加えたものとされる。この根拠として馬場紀寿

96) 復註においてダンマパーラはこれらの書が言及されていないことを問題視している。

DNT. 16 (Vol. II p. 213.24-25)を参照。

97) なお、馬場紀寿[2008: pp. 177.14-178.4]は、段階(E)において「小部」(Khuddakanikāya)に相当する諸典籍が、段階(D)では「小書」(Khuddaka-gantha)と呼ばれていることから、段階(D)から段階(E)へ展開するあいだに第五部として「小部」が成立したという見解を提示している。だが、「小部」に属する諸経が「小書」と呼ばれていることを根拠に、「小部」が存在しなかったと結論することの妥当性には些かの問題を感じる。なぜならこの前後の文脈は、これら「小書」と呼ばれる諸経が阿毘達磨蔵に入れられるべきか、それとも経蔵に入れられるべきかという二説の紹介である。もしもここで、これら諸経を最初から「小部」とであると言及してしまうと、それは経蔵の第五部であるという結論を先取してしまうことになるからである(なお、本章第二節二項「狭義と広義の小部」も参照)。

[2008 : p. 168.9-12] では、阿毘達磨を合誦した直後に起こった「大地の震動」が注目されている。この「大地の震動」が阿毘達磨蔵合誦の終わりに起こったので、ここで第一結集の本体部分が終了していることは明らかであるから、その次に合誦されたことになっている小部（小書）の記述は後代の付与である、というのである。だが、この理解についても再考の必要がある。なぜなら、小部（小書）が合誦された後に挿入される「仏語の分類」を挟んで、「第一結集の終了と共に大地の震動が起こった」という記述が存在するからである<sup>98)</sup>。従って、阿毘達磨蔵合誦の終わりに起こる「大地の震動」は、第一結集が終わったことを知らせる為のものではない。

また、この第一結集記事では「大地の震動」が賛辞（sādhukāra）と同義に理解されているが、この賛辞とは“声聞の所説”にも仏説としての権威が附託される重要な根拠である<sup>99)</sup>。従って、小部（小書）の合誦に対して「大地の震動」が起こらないことは、その他の律蔵・四部・阿毘達磨蔵ほどに権威が認められていなかったことを意味している。これを裏付けるようにブッダゴーサは、小部（小書）の合誦内容や収載先について、上座部内に一貫した理解があった

---

また、Mil. (pp. 341.26-342.1) では、既に第五部を Khuddaka と呼んでいる。そして、KhpA. (p. 12.7-25) では、明確に「小部」(Khuddaka-nikāya) に言及しつつも、それを構成する諸典籍を Khuddaka と呼んでいる。従って、「小書」と言及されることは、「小部」が無かったという根拠にはなり得ない。

98) DNA. (p. 25.15-21):

Samṅgītipariyosāne c' assa - “idaṃ Mahākassapaṭṭherena dasabalassa sāsanaṃ pañcavassasahassaparimāṇakālaṃ<sup>(1)</sup> pavattanasamatthaṃ katan” ti sañjātappamodā sādhu-kāraṃ viya dadamānā ayaṃ mahāpathavi udakapariyantaṃ katvā anekappakāraṃ kampi samkampi sampakampi sampavedhi, anekāni ca acchariyāni pātur ahesum<sup>(2)</sup>, ayaṃ paṭhamamahāsaṅgīti nāma.

そして合誦の終わりに、「これは長老マハーカッサパによって、十力者の教えが五千年のあいだ存続し得るように執り行われた」と沸き起こった歓喜から、賛辞（sādhukāra）を与えるかのように、この大地が水を周辺として、様々に震動し、震え、揺れ、激動した。また多くの稀有な出来事が起こった。これが第一合誦と呼ばれる。

(1) PTS: -parimāṇaṃ kālaṃ, VRI: -parimāṇakālaṃ

(2) PTS: -m, VRI: -n ti

この「大地の震動」は、合誦の終了に対して起こったものであり、小部（小書）の合誦に対して起こったものではない。本稿第一章一節「結集伝承と隠没伝承における小部」を参照。

99) 清水俊史 [2015e] を参照。

わけではなく、長部誦者と中部誦者とのあいだで見解の相違があったことを伝えている<sup>100)</sup>。

以上の考察からも明らかなように、「大地の震動」の有無を根拠にしながら、本来の第一結集記事が経蔵四部構造であったと主張することは適切ではないであろう<sup>101)</sup>。

#### 第四項 まとめ

前項までに考察してきたように、段階(A)(B)(C)(D)の根拠とされる諸資料は、いずれも旧三蔵（経蔵四部構成）を示す古資料ではないと結論付けられる。

- (1) 段階(A)(B)の根拠とされる隠没伝承は、三蔵に含まれながらも「律蔵・四部（経蔵）・阿毘達磨蔵」の外側に置かれた『ジャータカ』や「偈頌」の存在に言及しているから、第五部の存在を前提としている。そして、隠没伝承において小部が体系的に言及されていないこと

100) 本稿第一章一節「結集伝承における「大地の震動」」を参照。

101) もちろん本稿は、小部に関する記述が後代の増補である可能性までも否定するものではない。たとえば、『長部註』にある第一結集伝承では、律蔵の合誦が終わり経蔵の合誦に移ると、それには四つの合誦があると説かれていて、小部については触れられていない。これは小部がもともと経蔵外にあったことを示唆する。

DNA. (Vol. I p. 14.6-9):

Atha<sup>(1)</sup> āyasmā Mahākassapo bhikkhū pucchi - “kataraṃ, āvuso, piṭakaṃ paṭhamañ saṅgāyāmā” ti? “Suttantapiṭakaṃ, bhante” ti. “Suttantapiṭake catasso saṃgitiyo, tāsu paṭhamañ kataraṃ saṅgitin” ti? “Dighasaṅgitiṃ, bhante” ti. さて尊者マハーカッサパは比丘たちに尋ねた。「友よ、最初に何れの蔵を合誦するか?」。「尊師よ、経蔵です」と。「経蔵のうちには四つの合誦がある。そのうち最初に何れの合誦があるのか?」。「尊師よ、長〔部〕の合誦です」と。

- (1) PTS: *omit*, VRI: *add kho*

ただし、既に『長部註』冒頭部に残る「第一結集伝承」は、小部（小書）が合誦されていることが前提になっている点は留意されるべきである。またさらに、この加筆をブッダゴーサの手によるものであるとする積極的根拠はない。従って、上座部の長い歴史の中で経蔵が四部から五部に再編されたことを認めるにしても、「第一結集伝承」は五部構成となった後の資料であるから、馬場紀寿が主張する四部構成（古資料）を伝えているとは言い難い。

は、必ずしも小部の非存在を前提としているわけではない。

(2) 段階(C)の根拠として引用される「四大教法註」においても、『ジャータカ』など十二書は既に三蔵の内に収められているから、やはり第五部の存在を想起させる。

(3) 段階(D)の根拠になっている「大地の震動」の有無は、小部の権威が他より劣っていたことを意味するものであるから、もともと経蔵四部であった記事をブッダゴーサが五部に再編集した根拠とはならない。

従って、ブッダゴーサが手にしていた古資料が基本的に四部構成であり、このブッダゴーサこそが経蔵を四部から五部に再編成した主要人物であるという主張は認め難い<sup>102)</sup>。

## 第二節 小部とブッダゴーサ

前節において馬場紀寿によって提示された五段階説を批判的に考察することで、その根拠とされる資料がいずれも旧三蔵（経部四部）の構成ではない点を指摘した。このことは、ブッダゴーサ以前には四部構成が主流であったものが、ブッダゴーサの手によって五部構成に決定づけられたとする五段階説が成り立たないことを意味している。そこで本節では、ブッダゴーサが、どのように小部に対して関わったのかを再検討する。

### 第一項 四部から五部への再編纂の時期

まず本項では、ブッダゴーサ以前に成立したと考えられる上座部文献を材料にして、ブッダゴーサ以前の上座部三蔵の組織を考察する。前節において検討したように、ブッダゴーサ著作のなかに経蔵四部構成（旧三蔵）の姿をそのまま提示している資料は存在しない。ただし、多くの研究者が主張するように、上座部の経蔵が四部から五部に再編された痕跡が認められることは確かであ

102) 馬場紀寿 [2008 : pp. 194.16-195.5] を参照。もちろん本稿は、経蔵が四部から五部に再編纂したこと自体を否定するものではない。ただしその再編纂は、既にブッダゴーサが登場する以前に大方終了していたと理解することが妥当である。



る<sup>103)</sup>。なぜなら、『島史』(*Dīpavaṃsa*)に残される第一結集伝承は、経蔵を四部構成としており、小部には全く触れないからである<sup>104)</sup>。そして上座部に伝わる三種の隠没伝承を比較しても、小部の記述には一貫性が無い<sup>105)</sup>。これらの用例は、経蔵がもともと四部構成であったことを強く示唆している。

ここで問題となるのは、どの段階で經典四部構造が五部構造に再編されたかある。そこで本項では、この再編の時期を検討する。そして結論として、ブッダゴーサが登場した段階で、すでに経蔵は五部構成に再編されていたことを指摘したい。

この考察にあたって注意しなければならない点は、「四部師」(*catunekāyika*, *catunikāyika*)といった四部伝持者の名称が出てきたとしても、それは、経蔵が五部ではなく四部であった頃の名残であると単純には主張できないことである<sup>106)</sup>。なぜなら、既に先行研究が明らかにしているように、この小部に含まれる諸典籍は、四部と異なりその伝持者の存在が殆ど知られない<sup>107)</sup>。

103) 前田惠學 [別 1 (= 1964) : pp. 681-787]、森祖道 [1984 : pp. 274-282]、馬場紀寿 [2008 : pp. 155-253] を参照。また、塚本啓祥 [1980 (= 1966) : pp. 182-192] が諸部派の結集伝承において収載經典を纏めており、雑蔵にあたる文献の扱いは部派ごとに異なっている点も、その成立が遅れていたことを窺わせる。たとえば、有部においても雑蔵にあたる典籍を保持していたことが知られるが、それらは結集伝承では取り上げられていない。

104) Dv. 4, 15 (p. 31.24-26):

Pavibhattā imaṃ therā saddhammaṃ avināsaṇaṃ;  
Vaggapaññāsakaṃ nāma samyuttaṃ ca nipātaṃ;  
Āgamapiṭakaṃ nāma akappaṃ suttasammatāṃ.

長老たちは、この不滅の正法を「品」「五十〔編〕」「相応」「集」に分類して、阿含蔵と呼ばれる経の選定をした。

ここでの「品」とは「長部」の章割りに用いられる語であり、同じく「五十〔編〕」「相応」「集」の語も、それぞれ「中部」「相応部」「増支部」の章割りに用いられている。これについてはDv. (p. 135 note1) や前田惠學 [別 1 (= 1964) : pp. 191.6-192.5] を参照。

105) 本稿第一章二節「隠没伝承における小部の痕跡」を参照。

106) ただし、前田惠學 [別 1 (= 1964) : p. 694.10-13] や馬場紀寿 [2008 : p. 175.9-10] は、「四部師」という記述が経蔵四部構成の名残であると評価している。

107) Adikaram, E.W. [1946 : pp. 24-32]、森祖道 [1984 : pp. 274-282]、Norman, K.R. [4 : pp. 97.3-98.29] [1983 : pp. 8.30-9.30] を参照。また既に述べたように、有部においても、たとえ雑部に属する經典が引用されていたとしても、「雑部」という經典集そのものが言及されることは極稀であり、上座部と同様の流布事情があったことが予想される。本稿第一章「結集伝承と隠没伝承における小部」の冒頭部を参照。

したがって、伝持者の存在が知られない小部を保持しない四部伝持者が、経蔵が五部に編纂された後に存在していても不思議ではない。事実、ブッダゴーサ以前には成立していたと考えられる『ミリンダ王の問い』(*Milindapañha*)において四部師と五部師が並べられて置かれているし<sup>108)</sup>、ブッダゴーサより後に編纂された『大史』(*Mahāvamsa*)においても四部伝持者への言及が確認される<sup>109)</sup>。このように四部が一組として言及されていたとしても、注意深く前後の文脈を検討しなければ、それが経蔵四部構成だったところの古資料であると主張できない。これとは反対に、第六以上の「部」が存在していたは知られないから、五部への言及は既に上座部三蔵が五部構成であったことを意味する。ただし、経蔵が四部から五部へ再編集された後に、「四部」という記述が「五部」に書き換えられた可能性も考慮しなければならないため、現行の資料に残された記述が歴史的事実に直結するわけではない<sup>110)</sup>。

従って、ブッダゴーサ以前の小部の実態を把握するためには、ブッダゴーサより前に成立した文献のなかに現れる小部や四部、五部に関する記述を慎重に検討する必要がある<sup>111)</sup>。以下に、本研究が見出すことのできた十四の用例を列挙する。

108) Mil. (p. 22.10–11)

109) Mhv. 33, 73においても四部伝持者 (catunīkāyika) がいたことが記されている。この『大史』(Mhv.) はブッダゴーサ以降に編纂されたと考えられる (Hintüber [1996: § 185] を参照)。この問題となる箇所 (Mhv. 33, 73) は、ヴァッタガーマニー (Vatṭagāmaṇi) 王統治下 (在位: 前89–前77年) の出来事である。したがって、「この箇所は史実を反映していて未だ四部構成だった」と主張することも可能であるかもしれない。ただしそのように主張する場合には、本稿が続いて考察する『島史』に説かれる「五部」の記述も史実を反映していると理解することも可能なはずである。このように「四部師」への記述は、経蔵が四部構成であった根拠にはなり得ない。

110) 馬場紀寿 [2008: pp. 179.5–184.12] は、経蔵が「四部→五部」に再編された影響を受けて、聖典に記された「四部」も「五部」に書き改められた可能性を指摘する。

111) パーリ文献の成立年代については Hintüber [1996] を参照。

	四部	五部	備考
① Vin. (Vol. II p. 287.27-28)	—	○	第一結集記事
② Vin. (Vol. V p. 3.4-5)	—	◎	阿闍梨相承（狭義の小部）
③ Vin. (Vol. V p. 5) <sup>112)</sup>	—	◎	阿闍梨相承（狭義の小部）
④ Vin. (Vol. V p. 8)	—	◎	阿闍梨相承（狭義の小部）
⑤ Vin. (Vol. V p. 54)	—	◎	阿闍梨相承（狭義の小部）
⑥ Mil. (p. 22.10-11)	○	○	四部師と五部師が並び置かれる
⑦ Mil. (pp. 341.26-342.1)	—	○	他の誦者と共に列挙
⑧ Peṭa. (p. 11.26-27)	—	○	五部の存在に言及
⑨ Dv. 4, 15 (p. 31.24-26)	○	—	第一結集記事
⑩ Dv. 5, 33 (p. 36.19-20)	—	◎	第二結集記事（狭義の小部）
⑪ Dv. 7, 43 (p. 52.19-21)	—	◎	第三結集記事（狭義の小部）
⑫ Dv. 18, 13 (p. 97.5-6)	—	◎	比丘尼教団記事（狭義の小部）
⑬ Dv. 18, 19 (p. 97.18-19)	—	◎	比丘尼教団記事（狭義の小部）
⑭ Dv. 18, 33 (p. 98.18-19)	—	◎	比丘尼教団記事（狭義の小部）

◎：「狭義の小部」（経蔵の第五部）と明確に理解しうる用例

上記の十四の用例は、ブッダゴーサ以前の諸資料において、既に経蔵五部構成が上座部の標準的理解であったことを強く示唆する。さらに、本章第一節において検討したように、五段階説の根拠となっていた諸資料は、経蔵四部構成の旧三蔵をそのままに伝えているわけではなく、既にそこには小部の存在を窺わせる記述が確認される。よって「上記諸資料には元々は四部と記されていたが、後に五部と書き改められた」と積極的に認めなくてはならない根拠は存在しない。従ってブッダゴーサが登場した段階で、既に経蔵は五部構成に再編され終わっていたと考えられる。

## 第二項 狭義と広義の小部

前項では、ブッダゴーサ以前に成立した上座部文献においても「五部」に言及している用例が多数存在することを指摘した。続いて本項では、この五部のうちの第五部（小部）が何を意味しているのかを検討する。この第五部（小部）には狭義と広義の二種がある。狭義の小部は、経蔵中の第五部として数え

112) ③④⑤は②と同一のため PTS 版では省略されている。

られ、一般的にはこの意味で用いられる。一方の広義の小部は、これに律蔵と阿毘達磨蔵も加わる。このように狭義と広義の二種がある理由は、上座部が「法と律＝五部＝三蔵」という聖典観を抱いていたゆえに、律蔵と阿毘達磨蔵も五部のうちいずれかに含める必要があったからであると考えられる<sup>113)</sup>。

従って、上座部文献中に「五部」の語が現れたからといっても、このどちらの意味で用いられているのかを吟味しなければならない。さらに、第五部としての（すなわち狭義の）小部が三蔵に加えられた時期は、律蔵や阿毘達磨蔵が現在の形に整うよりも後であるという指摘もあるから<sup>114)</sup>、たとえ五部への言及があったからといって、それは「狭義の小部」を指しているのではなく、律蔵と阿毘達磨蔵を小部として言及しているとも考え得る。

しかしながら、前項において挙げた十四の用例は、「狭義の小部」が先に成立し、後から阿毘達磨と律蔵の二つが「広義の小部」のうちに含められたことを示唆している。なぜなら、この十四の用例のうち②③④⑤⑩⑪⑫⑬⑭の九つでは、五部の外側に阿毘達磨七論と律蔵に言及しているので、この九つの用例では狭義の意味、すなわち経蔵に含まれる第五部であることが解る<sup>115)</sup>。もし

113) DNA. (Vol. I pp. 15.30-24.32)

114) 馬場紀寿 [2008 : p. 193.12-14]

115) ②③④⑤の四つの用例は、とも同一の偈頌であり、パーリ律の阿闍梨相承において説かれる (PTS 版では③④⑤は、②と同一のために省略されている)。

Vin. (Vol. V p. 3.4-5, p. 5, p. 8, p. 54):

Vinayaṃ te vācayimṣu, piṭakaṃ tambapaṇṇiyā;

Nikāye pañca vācesuṃ, satta c' eva pakaraṇe.

彼らはタンバパンニ（セイロン島）において律蔵を誦した。五部と、七論を誦した。

用例⑩は、『島史』（Dv.）に残る偈であり、根本分裂において大衆部が経（sutta）を改竄したことを糾弾する内容である。PTS 版に基づけば「五部における利と法を破った」とあるが、興味深いことに VRI 版では「律と五部における利と法を破った」とあり、「律」に関する記述が後に増補された痕跡が確認される。この増補では五部が律の外側に置かれていることから、これが経蔵の意味で理解されていたことが確認される。

Dv. 5, 33 (p. 36.19-20):

Aññatha saṃgahitaṃ suttaṃ aññatha akariṃsu te;

Athaṃ dhammaṃ ca bhidiṃsu ye<sup>(1)</sup> nikāyesu pañcasu.

ある場所に集められた経を、別の個所に置き。そして、〔律と<sup>(2)</sup>〕五部における利と法を破った。

先に「広義の小部」が成立していたのであれば、「五部と、阿毘達磨藏と、律藏」というような上記九つの用例に見られる聖典の列挙方法は不自然である。第五部（小部）が経藏のみならず阿毘達磨藏と律藏をも含むものであることが大前提としてあったならば、このような混乱を引き起こす恐れのある記述は避けるであろう。そしてなにより、「広義の小部」を意味していると明確に読みうる資料は、ブッダゴーサ以降の著作でなければ存在しない<sup>116)</sup>。

(1) PTS: *omit*, VIR: *add vinaye*

(2) VRI 版に基づく

用例⑩は、第三結集の因縁を解説する偈頌であり、ここでは明確に五部（経藏）と阿毘達磨藏、律藏が別々に説かれている。

Dv. 7, 43 (p. 52.19-21):

Nikāye pañca vācesī satta c' eva pakaraṇe;

Ubbhatovibhaṅgaṃ vinayaṃ parivāraṇ ca khadhakaṃ;

Uggahī viro nīpuṇo upajjhāyassa santike ti.

〔モツガリプッタティッサは弟子マヒンダのために〕五部と七論を誦した。勇敢にして多才な〔マヒンダは〕親教師の元で両分別・附随・慥度部からなる律を学習した。

⑫⑬⑭の三つの用例は、比丘尼教団記事の箇所において説かれる同一偈頌である。これらの用例は、スリランカにある都アヌラダプラにおいて三藏（五部、阿毘達磨藏、律藏）が誦された旨を記録している。

Dv. 18, 13 (p. 97.5-6); Dv. 18, 19 (p. 97.18-19); Dv. 18, 33 (p. 98.19-20):

Vinayaṃ vācayimṣu piṭakaṃ anurādhapuravhaye;

Nikāye<sup>(1)</sup> pañca vācesuṃ satta c' eva pakaraṇe.

彼女たちはアヌラダプラと呼ばれる〔都〕で律藏と、五部<sup>(1)</sup>と、七論を誦した。

(1) Dv. 18, 13には *vinaya* とあるが *nikāye* に改める。『南伝大藏經』60 (p. 129 註4)を参照。

116) 上記の表で挙げた①⑥⑦⑧の用例は、後代の解釈無しに原文だけで「広義の五部」を指しているのか、それとも「狭義の五部」を指しているのか判別し得ない。

このうち用例①は、第一結集記事であり「五部」が登場している。後代の註釈家によれば、この第五部（小部）を「広義の小部」と解釈して、そのなかに「阿毘達磨藏」と「狭義の小部（小書）」とを収めている（ただし、Norman, K.R. [1983: p. 96.2-10] は、第一結集記事における五部とは狭義の意味であり、ここでは阿毘達磨が触れられていないと理解している）。

Vin. (Vol. II p. 287.27-28):

Eten' eva upāyena pañca pi nikāye pucchi. Puṭṭho puṭṭho āyasmā ānando vissajjesi.

この方便によって五部を問い、問われる度に尊者アーナンダが答えた。

従って、上座部においては、当初、四部構成だった経蔵に「狭義の小部」が加わることで五部構成になり、そして第一結集記事において収載されたとされる「法と律」「五部」という中に三蔵全体を収める必要があったために、小部の意味する範囲が拡大され「広義の小部」が成立したと考えられる。そしてこの一連の展開は、ブッダゴースが登場するまでにほぼ完了していたと結論付けられる。

---

用例⑥は、『ミリンダ王の問い』の冒頭部に置かれる偈頌である。本書は純粋な上座部文献ではないが、この箇所は対応漢訳箇所を欠いており、上座部に受容された後に増補された部分であると考えられる。ここでは五部師と並んで三蔵師と四部師が登場している。仮に上座部註釈文献の理解に基づいて第五部（小部）を広義の意味で捉えるなら、三蔵師と五部師は同一の意味になってしまうため、狭義の「小部」に言及していると考えられないことも無いが、決定的なことは不明である。

Mil. (p. 22.10-11):

Te ca tepīṭakā bhikkhū, pañcanekāyikā pi ca;

Catunekāyikā c' eva, nāgasenaṃ purakkharuṃ.

三蔵師と五部師と四部師との比丘たちはナーガセーナに従った。

用例⑦も、『ミリンダ王の問い』にある記述である。ここでは直前までに長部から増支部までが言及されているから、狭義の「小部」に言及していると読み得るが、やはり決定的なことは不明である。またこの箇所も、漢訳対応部を欠くため、上座部内における増広であると考えられる。

Mil. (pp. 341.26-342.1):

Bhagavato kho, mahārāja, dhammanagare evarūpā janā paṭivasanti, suttantikā venayikā ābhidhammikā dhammakathikā jātakabhāṇakā dīghabhāṇakā majjhimabhāṇakā samyuttabhāṇakā aṅguttarabhāṇakā khuddakabhāṇakā …後略…

大王よ、実に世尊の法の都には、次のような人々が過ごしています。経師、律師、阿毘達磨師、説法師、ジャータカ誦者、長〔部〕誦者、中〔部〕誦者、相応〔部〕誦者、増支〔部〕誦者、小〔部〕誦者…後略…

用例⑧は、『歳釈』における用例であるが、「五部」とあるだけでその詳細は解らない。なお、英訳者 Ñāṇamoli [1964 : p. 15 note45/1] は、この箇所が上座部文献において最も古い五部への言及であろうと述べている。

Peṭa. (p. 11.26-27):

Pañcanikāye anupaviṭṭhāhi gāthāhi gāthā anuminitabbā, byākaraṇena byākaraṇaṃ.

五部に含まれる偈頌によって偈頌は吟味されるべきであり、授記によって授記は〔吟味されるべきである〕。

### 第三項 ブッダゴーサによる「仏語の分類」

前項において結論付けたように、ブッダゴーサが登場した時には、既に経蔵は小部を含めた五部に再編纂され終わっていたと考えられる。このような状況を踏まえた上で本項では、ブッダゴーサが小部の構成についてどの様に関わっているのかを考察する。

ブッダゴーサ真作と位置付けられる四部註のうちには、小部の構成内容に言及する下りが何箇所か確認される。ところが現行の十五書すべてを列挙しているのは、「第一結集伝承」の途中に挿入される「仏語の分類」だけである（馬場説における段階(E)にあたる）。この「仏語の分類」では結集によって収載された「全ての仏陀の言葉」<sup>117)</sup>が種々の観点から分類されており、そのうち「三蔵」による分類法において「狭義の小部」が、「五部」による分類法において「広義の小部」が言及されている。まず、経蔵を定義するなかで「狭義の小部」は次のように規定される。

DNA. (Vol. I p. 17.4-14):

Brahmajālādicatuttimsasuttasaṃgaho Dīghanikāyo, Mūlapariyāya-suttādiyaḍḍhasatadvesuttasaṃgaho Majjhimanikāyo, Oghataṛaṇa-suttādisattasuttasahassasattasatadvāsaṭṭhisuttasaṃgaho Saṃyuttanikāyo, Cittapariyādānasuttādinavasuttasahassapañcasattapaññāsa-suttasaṃgaho Aṅguttaranikāyo, Khuddakapāṭha-Dhammapada-Udāna-Itivuttaka-Suttanipāta-Vimānavatthu-Petavatthu-Theragāthā-Therīgāthā-Jātaka-Niddesa-Paṭisambhidāmagga-Apadāna-Buddhavaṇsa-Cariyāpiṭakavasena pannarasabhedo<sup>118)</sup> Khuddakanikāyo ti idaṃ Suttantapiṭakaṃ nāma.

梵網〔経〕をはじめとする三十四経の集成である『長部』と、根本法門経をはじめとする百五十二経の集成である『中部』と、度暴流経をはじめと

117) この中には声聞たちによる教説なども含まれることから、ここでの「仏陀の言葉」とは、三蔵に含まれる聖典に付された抽象的概念を意味している。清水俊史 [2015e] を参照。

118) PTS: -bhedo, VRI: -ppabhedo



する七千七百六十二經の集成である『相應部』と、心遍取經をはじめとする九千五百五十七經の集成である『増支部』と、『クッダカパータ』『ダンマパダ』『ウダーナ』『イティヴッタカ』『スッタニパータ』『天宮事』『餓鬼事』『長老偈』『長老尼偈』『ジャータカ』『義釈』『無礙解道』『ブッダヴァンサ』『チャリヤーピタカ』『アパダーナ』による「小部」の十五種との以上が經藏と呼ばれる。

そして「広義の小部」は次のように規定される。

DNA. (Vol. I p. 23.23-26):

Katamo Khuddakanikāyo? Sakalaṃ Vinayapiṭakaṃ, Abhidhammapiṭakaṃ, Khuddakapāṭhādayo ca pubbe dassitā pañcadasappabhedā, ṭhapetvā cattāro nikāye avasesaṃ buddhavacanaṃ.

「小部」とは何か。全ての律藏と、阿毘達磨藏、〔そして〕『クッダカパータ』をはじめとする先に示された十五種類、すなわち「四部」を除く残りの仏陀の言葉である。

ここで説かれる五部という範疇と、それぞれの構成内容とが、その後の上座部において標準となった<sup>119)</sup>。この事実からも、ブッダゴーサが『長部註』の冒頭部に残した「仏語の分類」が、上座部の聖典觀に大きな影響を及ぼしたことは疑いない。

しかし、ブッダゴーサが独自の思想をもって小部を十五書に定め、三藏五部の範囲を固定化したと理解することは、おそらく妥当ではない<sup>120)</sup>。なぜならブッダゴーサ著作において言及される小部の内容は一定していないからである。馬場紀寿 [2008: pp. 212.11-213.5] は、段階(D)「第一結集傳承」が元々經藏四部構成であったのにも関わらず、ブッダゴーサが自身の見解を反映させる

119) Norman, K.R. [1997: p. 138.25-29, p. 145.30-34]、馬場紀寿 [2008: p. 188.12-15, p. 238 註91]

120) 馬場紀寿 [2008: pp. 194.1-195.5]

ために小部（小書）をそこに付記して経蔵五部構成に再編したと理解している<sup>121)</sup>。ところが、この段階(D)「第一結集伝承」では『クッダカパータ』を除く「十四書」しか小部（小書）として言及されていない。また同時に、段階(C)「四大教法註」においては、『クッダカパータ』『ブッダヴァンサ』『チャリヤーピタカ』を除く「十二書」しか言及されていない。これらの記述は、小部十五書という記述と齟齬を起こしている<sup>122)</sup>。もし、小部に対する確固たる見解がブッダゴーサにあったならば、これらの間にある齟齬を解消できた筈である。

それにもかかわらず、小部を十五書に統一していない事実は、ブッダゴーサの小部に対する立場を如実に物語っている。すなわち、ブッダゴーサには、小部を十五書に固定しようとする積極的・能動的な意図はなかったと考えられるのである。この齟齬の解消は、その後の上座部において、ブッダゴーサ以外の手によって試みられている。この解消の方途については次節において考察する。

### 第三節 ブッダゴーサ以後における小部

前節において指摘したように、ブッダゴーサ著作において言及される小部の構成内容には、一貫性があるとは言い難い。しかしながら、ブッダゴーサが『長部註』冒頭部の「仏語の分類」において小部として十五書を認めたことは、その後の上座部にとって大きな指針となったことは明らかである<sup>123)</sup>。それは現行の小部が十五書に限られ、それ以上増加しなかったことから裏付けられる<sup>124)</sup>。ところが、ここで問題となるのは、小部として十五書を定めたはずの

121) ただし、既に述べたように「第一結集伝承」から新古二層を導き出せたとしても、その編纂の主導者をブッダゴーサに帰すことは妥当ではない。

122) ましてや段階(D)「第一結集伝承」の途中に段階(E)「仏語の分類」が挿入されているのにもかかわらず、両箇所の小部は齟齬を起こしている。

123) ブッダゴーサ以降に成立した『クッダカパータ註』冒頭部においても十五書を小部として数えている。KhpA. (p. 12.7-11)を参照。本書は伝統的にはブッダゴーサ作とされるが、文献学的には後代の付託であるとされる。

124) ビルマやタイではこの十五書に加えて『導論』『蔵釈』『ミリンダ王の問い』『スッタサンガハ』なども小部に加えられているが、加えられたのは比較的近年のことであるらしい。Norman, K.R. [1997: pp. 140.27-141.9]、古山健一 [2007: pp. 69-70 註2] を参照。

ブッダゴーサ自身の著作において、この「小部＝十五書」という構成が厳守されていない点である。前節でも言及したように「第一結集伝承」において小部は十四書しか取り上げられておらず、そして「四大教法註」においては十二書しか挙げられていない<sup>125)</sup>。ここでの齟齬を表にすれば次のようになる。

	小部への言及（PTS版に基づく）
仏語の分類 <sup>126)</sup>	十五書
第一結集伝承 <sup>127)</sup>	『クッダカパータ』を除く十四書
四大教法註 <sup>128)</sup>	『ブッダヴァンサ』『チャリヤーピタカ』『クッダカパータ』を除く十二書

この齟齬を問題視したのは、ブッダゴーサではなく、その後の上座部仏教者たちである。諸版本の異読やダンマパーラによる復註を検討すると、「第一結集伝承」と「四大教法註」に残された十四書と十二書の記述を修正しようとした痕跡が確認される。本節ではその痕跡を辿りながら、ブッダゴーサ以降の小部受容について考察する。

## 第一項 十四書と十五書

まず本項では、「小部」の構成に関する記述の揺らぎを考察する。現行の小部十五書という枠組みは、最後に『クッダカパータ』が加えられることによって成立したことが先行研究によって明らかとなっている<sup>129)</sup>。これと関連して、ブッダゴーサ著作（及びブッダゴーサとほぼ同年代に成立した典籍<sup>130)</sup>）のう

なお、スリランカでは今でもこれらの書を三蔵に含めていない。

125) 隠没伝承においても小部の一部が言及されるが、その構成要素の仔細が説かれているわけではないのでここでは扱わない。また、ダンマパーラやサーリブッタなど後代の註釈家たちが、ブッダゴーサ註の隠没伝承における小部の扱いに疑義を提示していない事実は、隠没伝承に小部全てが説かれている必要性を感じていなかったことを意味する。

126) DNA. (Vol. I p. 17.2-16)

127) DNA. (Vol. I p. 15.22-29)

128) DNA. (Vol. II p. 566.2-6)

129) Lamotte, É. [1956] [1958 : pp. 171-174], Lamotte, É. (Webb-Boin, S. tr.) [1988a: pp. 156-159], 前田惠學 [別1 (= 1964) : pp. 770.13-772.17, pp. 773-774], Norman, K.R. [1983 : pp. 57.23-58.18], 馬場紀寿 [2008 : pp. 190.2-193.4]などを参照。

130) 『律註』(VinA.)と『法集論註』(DhsA.)は、伝統的にはブッダゴーサ著作とされるが、この真作性を疑う研究も多い。しかしながら、これら両書ともブッダゴーサの時代か

ちには、同一箇所であっても小部を「十四書」とするか「十五書」とするかで諸版本ならびに漢訳本のあいだに揺らぎが確認され、本来は「十四書」とあった筈の箇所が後に「十五書」と書き改められた痕跡が報告されている。不整合な記述は整合的に修正されていくという本文批評の原則に従えば、古い記述を残しているのは、より不整合な「十四書」である<sup>131)</sup>。よって、「小部=十五書」という枠組みと整合させるために、「十四書」とあった古い記述が「十五書」に書き改められたと考えることは合理的である。

たとえば、『長部註』冒頭部にある「第一結集伝承」では小部の構成要素が述べられているが、当初は『クッダカパータ』を除いた「十四書」と規定されていた筈が、後に「十五書」に修正された形跡が認められる。これを最も仔細に検討した馬場紀寿〔2008：pp. 228-229 註36〕は、PTS 版（およびスリランカ版）においては『クッダカパータ』が記載されていないが、ビルマ版とタイ版ではそこに『クッダカパータ』が加えられている点を指摘し、PTS 版の記述がより古いことを論証している。これと全く同じ現象が『法集論註』においても確認されており、PTS 版（およびスリランカ版）では小部を列挙して「十四書」とある部分が、ビルマ版（およびタイ版、インド版）では「十五書」となっている<sup>132)</sup>。またさらに、『律註』においても小部の構成要素に言及する下りがあるが、現行のパーリ文では「十五書」と定めているのにもかかわらず、漢訳された『善見律毘婆沙』の同箇所では『クッダカパータ』を除いた「十四書」しか言及されていない<sup>133)</sup>。

---

ら遠く離れていないうちに成立したものである。森祖道〔1984：pp. 469.7-470.18〕〔1992〕、Hinüber〔1996：§209, §221, §312〕、林隆嗣〔1997〕、馬場紀寿〔2008：p. 14.2-10, p. 238 註93〕を参照。

131) すなわち *Lectio difficilior potior* の原則である。田川建三〔1997：pp. 461.5-464.3〕を参照。

132) 馬場紀寿〔2008：pp. 189.12-14, p. 239 註97, 註98〕

133) この齟齬は古くから注目されている。VinA. (Vol. I p. 13 note5)、荻原雲来〔1938：p. 436.17-18〕、Lamotte, É.〔1956〕〔1958：p. 174〕、Lamotte, É. (Webb-Boin, S. tr.)〔1988a：pp. 158-159〕、水野弘元〔1：pp. 111.18-112.9〕、前田恵學〔別1（= 1964）：pp. 693.6-694.7〕、馬場紀寿〔2008：pp. 189.9-11〕を参照。まず現行のパーリ律には次のように十五書すべてが列挙されている。

VinA. (Vol. I p. 18.12-19):

このように、現在手にすることの出来る諸資料を比較すると、当初は「十四書」とあった箇所が「十五書」へ修正されている跡が確認される。従って、ブッダゴーサ著作においては、もともと小部の内容について「十四書」と「十五書」の両説が混在しており、その後に上座部において「小部＝十五書」という構成が定説として定着するに従って、それと齟齬を起こさぬよう「十四書→十五書」と書き改められていったと考えられる。ただし「十四書」のまま現在に伝わっている資料も存在することから、この修正はブッダゴーサの手によるも

---

khuddakapāṭha-dhammapada-udāna-itivuttaka-suttanipāta-vimānavatthu-petavatthu-theragāthā-therīgāthā-jātaka-niddesa-paṭisambhidā-apadāna-buddhavaṃsa-cariyāpiṭakavasena pannarasappabhedo khuddakanikāyo.

『クッダカパータ』『ダンマパダ』『ウダーナ』『イティヴッタカ』『スッタニパータ』『天宮事』『餓鬼事』『長老偈』『長老尼偈』『ジャータカ』『義釈』『無礙解道』『アパダーナ』『ブッダヴァンサ』『チャリヤーピタカ』という十五種が「小部」である。

一方、四八九年（もしくは四八八年）に漢訳された『善見律毘婆沙』には次のように十四書のみが言及され、『クッダカパータ』が小部の構成要素として説かれていない。

『善見律毘婆沙』巻1 (T24. 676a7-10) :

法句。喩。軀陀那。伊諦佛多伽。尼波多。毘摩那。卑多。涕羅。涕利伽陀。本生。尼娑婆。波致參毘陀。佛種性經。若用藏者。破作十四分。悉入。屈陀迦。

『法句』(Dhammapada)、『喩』(Apadāna)、『軀陀那』(Udāna)、『伊諦佛多伽』(Itivuttaka)、『尼波多』(Suttanipāta)、『毘摩那』(Vimānavatthu)、『卑多』(Petavatthu)、『涕羅』(Theragāthā)、『涕利伽陀』(Therīgāthā)、『本生』(Jātaka)、『尼娑婆』(Niddesa)、『波致參毘陀』(Paṭisambhidāmagga)、『佛種性經』(Buddhavaṃsa)、『若用藏者』(Cariyāpiṭaka) と破れて十四分と作りて悉く「屈陀迦」(Khuddaka) に入る。

この齟齬について荻原雲來 [1938 : p. 436.17-18] は、この箇所に確認される揺らぎから、『クッダカパータ』は当初小部に含まれず、後になって追補されたと理解する。しかし水野弘元 [1 : pp. 111.18-112.9] は、『善見律毘婆沙』の原本も小部十五書であったと理解し、訳出する際に「クッダカニカーヤ (小部)」と「クッダカパータ」が混同され、片方が削除してしまった結果であると述べている。ただし、現在残っている『善見律毘婆沙』の原文では「十四」と明示されているから、訳出による混乱と理解するよりも、現存するパーリ律の記述が後代に修正されたと見做すことがより実証的であろう。

また『善見律毘婆沙』は、漢訳者である僧伽跋陀羅 (Saṃghabhadra) と、その師たる三蔵法師とによって中国に齎され、四八九年（もしくは四八八年）に漢訳されたと伝わることから、この師たる三蔵法師がブッダゴーサ自身であった可能性が古来より指摘されている (水野弘元 [1 : pp. 118.4-126.12] を参照)。これは極めて魅力的な仮説であるが、根拠は「不可能ではない」という点に尽きて、積極的に採用すべき根拠があるわけではない。

のであるとは考え難い。従って両説が混在していたという事実をそのまま受け入れるならば、ブッダゴーサにとってこの両説のうち、どちらが“正しい説”であったのかを推し量ることは難しい。むしろ、両説が混在していたことは、ブッダゴーサにとって小部が「十四書」であるか「十五書」であるかは重要な問題として認識されていなかったことを反映していると考えられる。

## 第二項「四大教法註」に対するダンマパーラ復註

続いて、ブッダゴーサによる「四大教法註」と、それに対するダンマパーラの復註における小部の扱いを考察する。この「四大教法註」では、“経とは呼ばれない仏陀の言葉”として小部に該当する『ジャータカ』など十二書が言及されるが、『ブッダヴァンサ』『チャリヤーピタカ』『クツダカパータ』の三書は取り上げられていない<sup>134)</sup>。この箇所に対してダンマパーラによる復註(DNT.)は、そこに『ブッダヴァンサ』と『チャリヤーピタカ』が取り上げられていない点を問題視している<sup>135)</sup>。

DNT. 16 (Vol. II p. 213.24-25):

Buddhavaṃsacariyāpiṭakānaṃ pan' ettha aggahaṇe kārāṇaṃ maggitabbaṃ.

またここでは、『ブッダヴァンサ』と『チャリヤーピタカ』が含まれていない原因が探求されるべきである。

ここで重要な点は二つある。第一には、ダンマパーラの復註によればブッダゴーサ註における記述には不備があり、『ブッダヴァンサ』と『チャリヤーピタカ』が本来ならば加えられるべきであると理解されている点であり、第二には、このダンマパーラの復註においても『クツダカパータ』は取り上げられていない点である。すなわちこの箇所において“経とは呼ばれない仏陀の言葉”は、現行の小部十五書から『クツダカパータ』を除いた構成であり、これは前

<sup>134)</sup> DNA. 16 (Vol. II pp. 565.29-566.30)

<sup>135)</sup> 『長部註』(DNT.) はダンマパーラ真作であると考えられる。清水俊史 [2015] を参照。

項において検討した「小部十四書」と全く同一である。すなわちダンマパーラ著作においても小部を十四書とする説が残っていたことになる。

しかしながら、ダンマパーラが『クッダカパータ』を小部として認めていなかった（あるいは知らなかった）というわけではないようである。なぜなら、ダンマパーラ著『長部復註』において『クッダカパータ註』が引用されているが<sup>136)</sup>、この『クッダカパータ註』の冒頭部では小部が十五書から構成されることや<sup>137)</sup>、その十五書のうち『クッダカパータ』が筆頭に置かれている理由が説明されているからである<sup>138)</sup>。

従って、ブッダゴース著作における場合と同様に、ダンマパーラ著作においても「小部十四書」と「小部十五書」の両説が混在していたことが確認される。

### 第三項 上座部における小部の受容

このようにブッダゴース著作において小部の構成に齟齬が確認され、「仏語

136) DNT. 1 (Vol. 1 p. 158.17-20) を参照。またここでは、*Paramatthajotikā* という固有名詞を附したうで引用されているため、現行の『クッダカパータ註』を引用していると考えられる。なお、引用箇所は KhpA. (pp. 36.31-37.1) である。

137) KhpA. (p. 12.7-11):

Khuddakapāṭho, dhammapadam, udānaṃ, itivuttakaṃ, suttanipāto, vimānavatthu, petavatthu, theragāthā, therīgāthā, jātakam, niddeṣo, paṭisambhidā, apadānaṃ, buddhavaṃso, cariyāpiṭakam, vinayābhidhammapiṭakāni, ṭhapetvā<sup>(1)</sup> cattāro nikāye avasesaṃ buddhavacanaṃ khuddakanikāyo.

『クッダカパータ』『ダンマパダ』『ウダーナ』『イティヴッタカ』『スッタニパータ』『天宮事』『餓鬼事』『長老偈』『長老尼偈』『ジャータカ』『義釈』『無礙解道』『アバダーナ』『ブッダヴァンサ』『チャリヤーピタカ』という、律〔蔵〕・阿毘達磨蔵・四部を除いた残りの仏語が「小部」である。

(1) PTS: *omit*, VRI: *add vā*

上記の小部の定義においては、広義の小部が全く考慮されていない点も興味深い。狭義と広義の小部については、本章第二節二項「狭義と広義の小部」を参照。

138) KhpA. (p. 12.18-25):

Tesam pi khuddakānaṃ saraṇa-sikkhāpada-dvattiṃsākāra-kumārapañhamāṅgalasutta-ratanasutta-tirokuṭṭa-nidhikaṇḍa-mettasuttānaṃ vasena navappabhedo khuddakapāṭho ādi ācariyaparamparāya vācanāmaggaṃ āropitavasena na bhagavatā vuttavasena.

これら小〔書〕のうち、帰依・学処・三十二相・童子の問い・吉祥経・宝経・壁外・伏蔵・慈経によって九〔章〕に分けられた『クッダカパータ』が最初である。〔この順番は〕規範師たちの相承が読誦方法にのせたことによって〔定まったのであり〕、世尊が説いたことによって〔定まったのではない〕。



の分類」では十五書が、「第一結集伝承」では十四書が、「四大教法註」では十二書がその構成として説かれる。後代の上座部の標準的な聖典観である「小部=十五書」という構成に基づくならば、この「第一結集伝承」と「四大教法註」においても、本来ならば小部すべてが記述されていなければならない。さらにブッダゴーサ著作のうちには、同一典籍の同一箇所であっても小部を「十四書」とするか「十五書」とするかで、諸版本のあいだに記述の揺らぎが確認される。これに加え、当初は小部を十四書と規定していた記述が、後に十五書に修正されている痕跡までも確認される。この修正はブッダゴーサの手によるものであるとは考え難い。このようにブッダゴーサ著作のうちには、小部の規定を巡って多くの齟齬が確認され、統一的に理解できる内容とはなっていない。これらの齟齬が残されたままであることは、ブッダゴーサが自身の意志によって小部の構成内容を固定しようとはしていなかったことを物語っている。

この齟齬を修正しようとする動きは、ダンマパーラの復註において確認される。ダンマパーラは、ブッダゴーサが「四大教法註」において小部を十二書しか挙げられていない不備を指摘し、これを十五書ではなく十四書に修正している。この興味深い事実は、ダンマパーラの時代にも「小部=十四書」とする説が残っていたことを示唆している。この一方でダンマパーラ著作のうちには、小部を十五書と認めていたと読み得る記述も存在する。従って、ダンマパーラの段階において、小部を十二書とする立場は淘汰されているが、十四書と十五書の両立場は依然として確認される。

このように小部十四書という規定は、ブッダゴーサ以降もある程度の支持をもって残っていたと考えられる。いわば、十四書と十五書という両規定が上座部内で併存していた期間があったことを予想させる。確かにブッダゴーサが著した「仏語の分類」に述べられる「小部=十五書」の構成は、その後の上座部に重大な影響力を与えた。しかしそれはブッダゴーサが意図したことではなく、その後の上座部において「仏語の分類」に説かれる三蔵五部の構成範囲こそが正統説であるとして評価して受容されたことによると言えるだろう<sup>139)</sup>。そし

139) 一方で、段階(A)(B)(C)に含まれる隠没伝承( $\alpha$ )( $\beta$ )( $\gamma$ )に対して註釈文献は、そこにおいて「小部」の体系的記述が欠けていることを問題視していない。これは、本稿が言

てそれは長い上座部の伝統において徐々に受容されていったものと考えられる。

## 結論

以上、本章は、上座部における小部の成立と受容について考察することで、次の点を指摘した。

- (1) 第一結集伝承において小部（小書）の合踊に「大地の震動」が起きていないこと、そして三種の隠没伝承において小部が体系的に説かれていないことは、小部の権威性が十分に上座部において認められておらず、教法を維持するための必須条件として目されていなかった事情を反映していると考えられる。従って、これらの諸資料における小部の差異は、必ずしもその成立事情を反映しているわけではない。
- (2) ブッダゴーサ以前には経蔵を四部とする立場が主流であり、ブッダゴーサこそが経蔵を五部に再編した主要人物であるとする馬場紀寿の所説は、その根拠が羸弱である。根拠とされる何れの資料も経蔵四部構成であるとは言い難く、すでに経蔵五部構成のもとに増補されている跡が確認される。
- (3) そして、ブッダゴーサ以前に成立していたと考えられる上座部資料を検討すると、すでに経蔵には第五部の存在が多く確認され、むしろ経蔵が四部に限られることを明示している資料は希少である。従って、ブッダゴーサ以前から既に上座部の経蔵は五部構成に再編し終わっていたと考えられる。
- (4) 『長部註』冒頭部の「仏語の分類」においてブッダゴーサが規定した「小部＝十五書」という構成が、その後の上座部において標準的な定説となった。しかしながら、1) ブッダゴーサ著作のうちでは小部の構成内容に揺らぎがみられ一定しておらず、2) 小部について十四書説と十五書説との二つがブッダゴーサ以後もしばらく併存していて、

---

及してきたように、小部に収載されている諸経は、十分な権威性が認められていなかったために、教法が隠没する必須条件として認められていなかったものと考えられる。

3) 現在残っている諸版本を比較すると当初は十四書とあったはずの箇所が十五書に修正された痕跡が確認される。従ってこの三点から、上座部における三蔵五部の構成範囲は、ブッダゴーサが主体的・能動的に定めようとしたものではなく、その後の仏教者たちがブッダゴーサの残した「仏語の分類」こそがその範囲を決定するものと評価したことによって定められたと結論付けられる。

## 総括

本稿は第一章において上座部における小部の権威性について考察し、続く第二章において小部の成立と受容を考察した。以上より、仏滅後からブッダゴーサを経て、ダンマパーラに至るまでの「小部」の成立と受容は、次のような段階を経たと予想される。

- (1) 仏滅後に残された「仏陀の言葉」は、仏弟子たちによって、その内容に応じて『長部』『中部』『相応部』『増支部』という四部に収められた。この四部から漏れた様々な種類の経典（主として偈頌経典）は、蔵外文献として扱われ、仏教教理の体系化にあたって重視されず、『ジャータカ』と『ダンマパダ』の例外を除いて教団内には誦者も伝持者も存在しなかった。
- (2) これら蔵外文献は、後に経蔵の第五部「小部」として組み込まれる。この時期は不明であるが、ブッダゴーサが登場するときまでには五部という範疇が、上座部の定説になっていたと考えられる。しかし経蔵が五部に再編成された後にも、「小部」の実質的な内容は定まっていなかった<sup>140)</sup>。
- (3) ブッダゴーサが著した四部註を検討すると、その段階では、『ダンマ

140) このように小部の構成内容が徐々に増加し得た理由は、おそらく当初の「小部」の定義が「律蔵・阿毘達磨蔵・四部（経蔵）以外の仏語」というものであったからであると予想される。KhpA. (p. 12.7-11)、DNA. (Vol. I p. 23.23-26) を参照。

パダ』『ウダーナ』『イティヴッタカ』『スッタニパータ』『アパダーナ』『天宮事』『餓鬼事』『長老偈』『長老尼偈』『ジャータカ』『義釈』『無礙解道』という十二書が、小部の構成要素として広く認知されていたと考えられる。残る『ブッダヴァンサ』『チャリヤーピタカ』『クツダカパータ』の三書が小部の構成要素として認められるかどうかは諸資料のあいだで一致していない。

- (4) このように小部の内容が定まらない中であって、ブッダゴーサが『長部註』の「仏語の分類」において十五書すべてを小部に含めたことは、後の上座部にとって重要な指針となった。だが、これはブッダゴーサが小部を十五書に規定しようと明確な意図を持っていたわけではない。ブッダゴーサ著作のうちでは、本来ならば小部すべてが列挙されなければならない箇所であっても、「第一結集伝承」では十四書（『クツダカパータ』を除く）だけが言及され、「四大教法註」では十二書（さらに『ブッダヴァンサ』『チャリヤーピタカ』を除く）しか言及されていないなど、小部の構成について齟齬が残されたままである。
- (5) ブッダゴーサより後に成立したダンマパーラ著作においては、小部の構成について十二書説は淘汰されているものの、十四書と十五書との両説は併存したまま残されている。従って、上座部における小部の構成内容は、十四書とするか十五書とするかでブッダゴーサ以降もしくはらくは確定されることはなかったと予想される。

従って、ブッダゴーサが果たした「小部」への役割は、蔵外にあった小部を三蔵の中に加えるという独創的な思想家としてのものではなく、上座部に受け継がれてきた種々の伝承を纏め上げて、そのなかの十五書を「小部」として承認した註釈家としてのものであると結論付けられる。

## Abbreviations

### アルファベット略号

- ADV. *Abhidharmadīpa-Vibhāṣāprabhāvṛtti* - P. S. Jaini (ed.), *Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāvṛtti*, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1959.
- AKBh. *Abhidharmakośa-Bhāṣya* - P. Pradhan (ed.), *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.
- AKUp. *Abhidharmakośa-ṭīkā Upāyikā* (chos mngon pa'i mdzod kyi 'grel bshad nye bar mkho ba zhes bya ba), Peking No. 5595, Derge No. 4094; 資料番号については本庄良文 [2014] を参照。
- AN. *Āṅuttara-Nikāya* - R. Morris (ed.), A.K. Warder (rev.), *The Āṅuttara-nikāya*, vol. 1, London: Pali Text Society, 1961 (1<sup>st</sup> ed. 1885); R. Morris (ed.), vols. 2-3, 1888-1897 (rep. 1955-1958); E. Hardy (ed.), vols. 4-5, 1899-1900 (rep. 1958).
- ANA. *Āṅuttaranikāya-Aṭṭhakathā (Manorathapūraṇī)* - M. Walleser and H. Kopp (ed.) - *Manorathapūraṇī: Buddhaghosa's commentary on the Āṅuttara-Nikāya*, 5 vols., 1924-1957; Revised edition, vols. 1-2, London: Pali Text Society, 1967-1973; Reprint, vols. 3-5, 1966-1979.
- ANpṬ. *Āṅuttaranikāya-Purāṇaṭīkā (Līnatthappakāsini)* - P. Pecenko (ed.), *Āṅuttaranikāyapurāṇaṭīkā: Catutthā Līnatthapakāsini*, Bristol: Pali Text Society, 2012.
- ANT. *Āṅuttaranikāya-Ṭīkā (Sāratthamañjūsā)* - Dhammagiri-Pāli-ganthamālā edition, vols. 44-46, *Āṅuttaranikāye Sāratthamañjūsā*, 3 vols., Igaṭapuri: Vipassanā Viśodhana Vinyāsa, 1995.
- CpA. *Cariyāpiṭaka-Aṭṭhakathā (Paramatthadīpanī)* - D. L. Barua (ed.), *Achariya Dhammapāla's Paramatthadīpanī: being the commentary on the Cariyāpiṭaka*, London: Pali Text Society, 1939; 2<sup>nd</sup> edition, London: Pali Text Society, 1979.
- DhsA. *Dhammasaṅgaṇī-Aṭṭhakathā (Atthasālinī)* - E. Müller (ed.), *Atthasālinī: Buddhaghosa's Commentary*, London: Pali Text Society, 1897; Revised edition, L.S. Cousins (ed.), London: Pali Text Society, 1979.
- Divy. *Divyāvadāna* - E. B. Cowell and R. A. Neil (eds.), *The Divyāvadāna: a collection of early Buddhist legends, now first edited from the Nepalese Sanskrit mss. in Cambridge and Paris*, Cambridge: At the University Press, 1886.
- DN. *Dīgha-Nikāya* - T. W. Rhys Davids and J. E. Carpenter (eds.), *Dīgha-nikāya*, vols. 1-2, London: Pali Text Society, 1889-1903 (rep. 1966-1975); J. E. Carpenter (ed.), vol. 3, 1911 (rep. 1976).
- DNA. *Dīghanikāya-Aṭṭhakathā (Sumaṅgalavilāsini)* - T. W. Rhys Davids and J. E. Carpenter (eds.), *Sumaṅgala-vilāsini: Buddhaghosa's Commentary of the Dīgha Nikāya*, vol. 1, London: Pali Text Society, 1929 (2<sup>nd</sup> ed. 1968); W. Stede (ed.), vols. 2-3, 1931-1932 (2<sup>nd</sup> ed. 1971).
- DNT. *Dīghanikāya-Ṭīkā (Līnatthappakāsini)* - Lily de Silva (ed.), *Dīghanikāya-*

- ṭṭhakathāṭṭikā Līnatthavaṇṇanā*, 3 vols., London: Pali Text Society, 1970.
- Dv. *Dīpavaṃsa* - Hermann Oldenberg (ed.), *The Dīpavaṃsa: An Ancient Buddhist Historical Record*, London: Williams and Norgate, 1879; reprint, Oxford: Pali Text Society, 2000.
- JPTS *Journal of the Pali Text Society*.
- Khp. *Khuddakapāṭha* - Helmer Smith (ed.), *The Khuddaka-pāṭha, together with its commentary, Paramatthajotikā I*, London: Pali Text Society, 1915; Reprint, London: Pali Text Society, 1978.
- KhpA. *Khuddakapāṭha-Aṭṭhakathā (Paramatthajotikā)* - Helmer Smith (ed.), *The Khuddaka-pāṭha, together with its commentary, Paramatthajotikā I*, London: Pali Text Society, 1915; Reprint, London: Pali Text Society, 1978.
- Mhv. *Mahāvaṃsa* - W. Geiger (ed.), *The Mahāvaṃsa*, London: Pali Text Society, 1908.
- Mil. *Milindapañha* - V. Trenckner (ed.), *The Milindapañho: Being Dialogues between King Milinda and the Buddhist Sage Nāgasena*, London: Pali Text Society, 1886.
- MN. *Majjhima-Nikāya* - Vilhelm Trenckner (ed.), *The Majjhima-Nikāya*, 3 vols., London: Pali Text Society, 1888-1902; Reprint, London: Pali Text Society, 1974-1979.
- MNA. *Majjhimanikāya-Aṭṭhakathā (Papañcasūdanī)* - I. B. Horner (ed.), *Papañcasūdanī: Majjhimanikāyaṭṭhakathā of Buddhaghosācariya*, 5 vols., London: Pali Text Society, 1937-1938; Reprint, London: Pali Text Society, 1977-1979.
- MNṬ. *Majjhimanikāya-Ṭīkā (Līnatthappakāsini)* - Dhammagiri-Pāli-ganthamālā edition, vols. 19-22, *Majjhimanikāye Līnatthappakāsana*, 4 vols., Igatapurī: Vipāśyanā Viśodhana Vinyāsa, 1995.
- NettiA. *Nettipakaraṇa-Aṭṭhakathā* - Dhammagiri-Pāli-ganthamālā edition, *Khuddakanikāye Nettipakaraṇa-aṭṭhakathā*, Igatapurī: Vipāśyanā Viśodhana Vinyāsa, 1998.
- Peṭa. *Peṭakopadesa* - Arabinda Barua, *The Peṭakopadesa*, London: Pali Text Society, 1949.
- PTS Pali Text Society.
- Sn. *Suttanipāta* - Dines Andersen and Hermer Smith (eds.), *Sutta-nipāta*, London: Pali Text Society, 1913; Reprint, London: Pali Text Society, 1965.
- SN. *Samyutta-Nikāya* - Léon Feer (ed.), *The Samyutta-nikāya of the Sutta-piṭaka*, 6 vols., London: Pali Text Society, 1884-1904; Reprint, London/Oxford: Pali Text Society, 1960-1990.
- SnA. *Suttanipāta-Aṭṭhakathā* - Hermer Smith (ed.), *Sutta-Nipāta Commentary (Paramatthajotikā II)*, 3 vols., London: Pali Text Society, 1916-1918; Reprint, Reprint, London: Pali Text Society, 1966-1972.
- SNA. *Samyuttanikāya-Aṭṭhakathā (Sāratthappakāsini)* - F. L. Woodward (ed.), *Sāratthappakāsini: Buddhaghosa's commentary on the Samyutta-nikāya*, 3

- vols., London: Pali Text Society, 1929-1937; Reprint, London: Pali Text Society, 1977.
- SNṬ. *Samyuttanikāya-Ṭīkā (Līnatthappakāsini)* - Dhammagiri-Pāli-ganthamālā edition, vols. 32-34, *Samyuttanikāye Līnatthappakāsana*, 3 vols., Igatapurī: Vipāśyanā Viśodhana Vinyāsa, 1994.
- T 大正新脩大藏經.
- VibhA. *Vibhaṅga-Aṭṭhakathā (Sammohavinodanī)* - A. P. Buddhadatta (ed.), *Sammoha-vinodanī: Abhidhamma-Piṭake Vibhaṅgathakathā*, London: Pali Text Society, 1923; Reprint: London: Pali Text Society, 1980.
- Vin. *Vinaya* - Oldenberg H. (ed.), *The Vinaya Piṭakam*, 5 vols., London: Williams and Norgate, 1879-1883; Reprint, London/Oxford: Pali Text Society, 1982-1993.
- VinA. *Vinaya-Aṭṭhakathā (Samantapāsādikā)*, J. Takakusu and M. Nagai (eds.), *Samantapāsādikā: Buddhaghosa's commentary on the Vinaya Piṭaka*, 7 vols., London: Pali Text Society, 1924-1947; Reprint: London: Pali Text Society, 1966-1981.
- VinṬ(Sd). *Sāratthadīpanī-Ṭīkā* - Dhammagiri-Pāli-ganthamālā edition, vols. 96-98, *Vinayapiṭake Sāratthadīpanī-ṭīkā*, 3 vols., Igatapurī: Vipāśyanā Viśodhana Vinyāsa, 1998.
- Vis. *Visuddhimagga* - C. A. F. Rhys Davids (ed.), *The Visuddhi-magga of Buddhaghosa*, 2 vols., London: Pali Text Society, 1920-1921; Combined reprint, London: Pali Text Society, 1975.
- VRI Vipassana Research Institute - Chaṭṭha Saṅgāyana Tipiṭaka, based on Dhammagiri-Pāli-ganthamālā edition.

漢訳資料の略号（大正新修大藏經の収録順）

- 『雜阿含』 求那跋陀羅譯『雜阿含經』 T02 (No. 99).
- 『出曜經』 竺佛念譯『出曜經』 T04 (No. 212).
- 『十誦律』 後秦北印度三藏弗若多羅譯『十誦律』 T23 (No. 1435).
- 『薩婆多毘尼毘婆沙』 失譯『薩婆多毘尼毘婆沙』 T23 (No. 1440).
- 『根本有部毘奈耶』 義淨奉『根根本說一切有部毘奈耶』 T23 (No. 1442).
- 『根本有部苾芻毘奈耶』 義淨奉『根本說一切有部苾芻毘奈耶』 T23 (No. 1443).
- 『善見律毘婆沙』 簫齊外國三藏僧伽跋陀羅譯『善見律毘婆沙』 T24 (No. 1462).
- 『大毘婆沙論』 五百大阿羅漢等造玄奘譯『阿毘達磨大毘婆沙論』 T26 (No. 1545).
- 『毘曇婆沙論』 迦旃延子造五百羅漢釋浮陀跋摩共道泰等譯『阿毘曇毘婆沙論』 T28 (No. 1546).
- 『鞞婆沙論』 尸陀槃尼撰僧伽跋澄譯『鞞婆沙論』 T28 (No. 1547).
- 『順正理論』 尊者衆賢造玄奘譯『阿毘達磨順正理論』 T29 (No. 1562).
- 『藏頭宗論』 尊者衆賢造玄奘譯『阿毘達磨藏頭宗論』 T29 (No. 1563).
- 『瑜伽師地論』 彌勒菩薩說玄奘譯『瑜伽師地論』 T30 (No. 1579).
- 『成實論』 訶梨跋摩造鳩摩羅什譯『成實論』 T32 (No. 1646).



## Bibliography

Adikaram, Edward Winifred

- [1946] *Early History of Buddhism in Ceylon: or, State of Buddhism in Ceylon as revealed by the Pāli commentaries of the 5th century A.D.*, Colombo: M. D. Gunasena.

An, Yang-Gyu

- [2002] “Canonization of the Word of the Buddha: With Reference to Mahāpadesa,” *Buddhist and Indian Studies in Honour of Professor Sodo MORI* (森祖道博士頌寿記念・論文集), Hamamatsu: Kokusai Bukkyoto Kyokai, 2002, pp. 55-67.

Brough, John

- [1980] “Sakāya niruttīyā: Cauld kale het,” *Die Sprache der ältesten buddhistischen*, Gottingen: Vandenhoeck & Ruprecht, pp. 35-42.

Collins, Steven

- [1990] “On the very idea of the Pāli canon,” *JPTS*, vol. XV, pp. 89-126.  
[2005] “On the very idea of the Pāli canon,” *Critical Concepts in Religious Studies: Buddhism*, Vol. 1, London: Routledge, pp. 72-95.

Hinüber, Oskar von

- [1996] *A Handbook of Pāli Literature*, Berlin: Walter de Gruyter.

Rhys Davids, Thomas William

- [1903] *Buddhist India*, New York: G. P. Putnam's Sons.

Lamotte, Étienne

- [1949] “La critique d'interprétation dans le bouddhisme,” *Annuaire de l'Institut de Philologie et d'Histoire Orientales et Slaves*, Vol. 9, pp. 341-361.  
[1956] “Problèmes concernant les textes canoniques ”mineurs,” *Journal asiatique*, Vol. 244, pp. 249-264.  
[1957] “Khuddakanikāya and Kuṣḍrakapiṭaka,” *East and West*, Vol. 7(4), pp. 341-348.  
[1958] *Histoire du bouddhisme indien: dès origines à l'ère Śaka*, Louvain: Université catholique de Louvain, Institut orientaliste.

Lamotte, Étienne (English translation by Webb-Boin, Sara)

- [1985] “The Assessment of Textual Interpretation in Buddhism,” *Buddhist Studies Review*, Vol. 2, No. 1-2, pp. 4-24  
[1988a] *History of Indian Buddhism: From the Origins to the Śaka Era*, Louvain: Université catholique de Louvain, Institut orientaliste.  
[1988b] “The Assessment of Textual Interpretation in Buddhism,” *Buddhist Hermeneutics*, Kuroda Institute, pp. 11-27.

Law, Bimala Chuen

- [1933] *A History of Pāli Literature*, 2 vols., London: K. Paul, Trench, Trubner.  
[2000] *A History of Pāli Literature*, New Delhi: Indica Varanasi.

Lévi, Sylvain

- [1915] “Sur la Récitation Primitive des Textes Bouddhiques,” *Journal asiatique*, 11 Série, Tome 5, pp. 401-447.
- Levman, Bryan  
[2009] “Sakāya niruttīyā Revisited,” *Bulletin des Études Indiennes*, No. 26-27 2008-2009, pp. 33-59.
- Ñāṇamoli, Bhikkhu  
[1964] *The Piṭaka-Disclosure: Peṭakopadesa*, London: Pali Text Society.
- Norman, Kenneth Roy  
[1-8] *Collected papers*, 8 Vols., Oxford: Pali Text Society, 1990-2007.  
[1983] *Pāli Literature: including the canonical literature in Prakrit and Sanskrit of all the Hinayāna schools of Buddhism*, Wiesbaden: O. Harrassowitz.  
[1997] *A Philological Approach to Buddhism: the Bukkyō Dendō Kyōkai lectures 1994*, London: School of Oriental & African Studies, (online edition, 2012).
- Skilling, Peter  
[2000] *Mahāsūtras: Great Discourses of the Buddha*, 2 vols., Oxford: Pali Text Society.
- Warder, Anthony Kennedy  
[1981] “Some Problems of the Later Pali Literature,” *JPTS*, Vol. IX, pp. 198-207.
- Winternitz, Moriz  
[1908-1920] *Geschichte der Indischen Literatur*, 3 vols., Leipzig: C. F. Amelang.
- 青野道彦  
[2005a] 「四大教法 (cattāro mahāpadesā) の解釈の変遷 —ブッダゴーサにおける転換—」, 『インド哲学仏教学研究』12, pp. 40-52.  
[2005b] 「「四種律」(catubbidhavinaya) の適用範囲とその意義」, 『パーリ学仏教文化学』19, pp. 65-73.  
[2007] 「註釈家による Catumahāpadesakathā の理解 —「世尊の言葉」の意味をめぐって—」, 『仏教文化研究論集』11, pp. 40-56.
- 石上善応  
[1956] 「仏教初期の説誦經典について」, 『宗教文化』11, pp. 48-58.  
[1967] 「初期仏教における説誦の意味と説誦經典について」, 『三康文化研究所年報』2, pp. 45-90.
- 字井伯寿  
[1-6] 『印度哲學研究』, 岩波書店, 1965.
- ヴィンテルニッツ (中野義照 訳)  
[1964-1978] 『インド文献史』全6巻, 日本印度学会.
- 荻原雲來  
[1938] 『荻原雲來文集』, 荻原博士記念會. (再版: 山喜房仏書林, 1972)
- 勝本華蓮  
[2006] 「Cariyāpiṭakaṭṭhakathā と Bodhisattvabhūmi —パーリ註釈書にみら

れる瑜伽行派の思想一」,『佛教研究』34, pp. 173-192.

[2011] 「菩薩と菩薩信仰」,『シリーズ大乘3 大乘仏教の実践』,春秋社, pp. 167-204.

[2012] 「パーリ仏教における菩薩の語義 —ブツダゴーサ註釈と復註文献との異同一」,『佛教研究』40, pp. 182-200.

加納和雄

[2011] 「*Ekagāthā, Cathurgāthā, Gāthādvayadhāraṇī* —11世紀のインド仏教における読誦經典のセッター」,『密教文化』227, pp. 49-87.

楠本信道

[2010] 「『釈軌論』・『縁起経釈』・『第一義宝函』における縁起の語義解釈」,『人間文化研究所年報』21, pp. 49-70.

櫻部建

[2002b] 「最も初期の仏教について」,『印度哲学仏教学』17, pp. 18-29.

佐々木閑

[1985] 「Mahāsūtra —『デルカンマ目録』にあらわれる根本有部系經典群一」,『佛教研究』15, pp. 95-108.

[2011c] 「大乘仏教起源論の展望」,『シリーズ大乘仏教1 大乘仏教とは何か』,春秋社, pp. 73-112.

清水俊史

[2014f] 「パーリ上座部における相統転変差別 —経部と上座部の接点—」,『佛教史学研究』57(1), pp. 1-19.

[2015c] “The Doctrinal Canonization of the *Kathāvatthu*,” *Journal of Indian and Buddhist Studies*, Vol. 63, No. 3, pp. 149-155.

[2015e] 「パーリ上座部の経蔵に収載される“声聞の所説”の権威性を巡って」,『佛教大学仏教学会紀要』20, pp. 99-123.

[2015ℓ] 「上座部註釈家ダンマパーラに帰せられる著作群の成立順序」,『南アジア古典学』10, pp. 105-129.

[2015m] 「パーリ上座部における阿毘達磨の因縁と仏説論」,『インド学チベット学研究』19.

周柔含

[2009] 『説一切有部の加行道論「順決択分」の研究』,山喜房佛書林.

田川建三

[1997] 『書物としての聖書』,勁草書房.

塚本啓祥

[1966] 『初期佛教教團史の研究 一部派の形成に関する文化史的考察一』,山喜房佛書林.

[1980] 『改訂増補 初期佛教教團史の研究 一部派の形成に関する文化史的考察一』,山喜房佛書林.

辻直四郎

[1-4] 『辻直四郎著作集』全4巻,法蔵館,1981-1982.

中村元

[1-32, 別1-8] 『中村元選集 [決定版]』全32巻・別巻8巻,春秋社,1988-1997.

浪花宣明

- [1998] 『サーラサンガハの研究 ―仏教教理の精要―』, 平楽寺書店.

西村実則

- [1987] 「サンスクリットと部派仏教教団(上)」, 『三康文化研究所年報』 19, pp. 59-100.  
[1995] 「サンスクリットと部派仏教教団(中)」, 『三康文化研究所年報』 26/27, pp. 33-79.

馬場紀寿

- [2005a] 「パーリ聖典の成立順序 ―「アビダンマ蔵」と「クツダカニカーヤ」の編纂―」, 『佛教研究』 33, pp. 83-103.  
[2008] 『上座部仏教の思想形成 ―ブッダからブッダゴーサヘ―』, 春秋社.  
[2010] 「初期経典と実践」, 『新アジア仏教史 3 仏典からみた仏教世界』, 佼成出版社, pp. 67-103.  
[2011] 「上座部仏教と大乘仏教」, 『シリーズ大乘仏教 2 大乘仏教の誕生』, 春秋社, pp. 139-171.

林隆嗣

- [1997] 「アッタサーリニーの著者について ―Suttantaṭṭhakathā と Āgamaṭṭhakathā―」, 『印度学仏教学研究』 46(1), pp. 102-106.  
[2011] 「上座部の共業 (sādhāraṇa-kamma) について ―ダンマパーラ以降―」, 『印度学仏教学研究』 60(1), pp. 221-228.  
[2013b] 「仏典結集で収載されなかった経典 ―Kuḷumbasutta と Catuparivaṭṭasutta を中心に―」, 『パーリ学仏教文化学』 27, pp. 21-46.  
[2014a] 「仏典結集で収載されなかった Rājovādasutta (諫王経) ―パーリ註釈文献の源泉資料に関連して―」, 『印度学仏教学研究』 62(2), pp. 209-216.  
[2014b] 「『清浄道論』に挿入された目連の竜王退治物語 ―ナンドーパナンダ (ナンダウパナンダ) の調伏―」, 『こども教育宝仙大学紀要』 5, pp. 37-45.  
[2014d] 「仏典結集で収載されなかった Nandopananda [-nagarajadamana] と北伝資料について」, 『印度学仏教学研究』 63(1), pp. 203-210.  
[2014e] 「仏典結集で収載されなかった Nandopananda [-nagarajadamana] ―上座部における外典文書の形成と展開―」, 『パーリ学仏教文化学』 28, pp. 47-68.

平川彰

- [1-17] 『平川彰著作集』全17巻, 春秋社, 1988-2000.  
[1960] 『律蔵の研究』, 山喜房佛書林.

吹田隆道

- [1988] 「東トルキスタン有部の読誦経典」, 『三康文化研究所年報』 20, pp. 27-49.  
[1992] 「『十誦律』に見る「大経」と方広経典 ―パリヤーヤ態を中心に―」, 『印度学仏教学研究』 40(2), pp. 127-131.

藤田祥道

- [1998] 「仏語の定義をめぐる考察」, 『インド学チベット学研究』 3, pp. 1-51.

古山健一

- [2007] 「*Nettipakaraṇa* の末文に対する *Netti-aṭṭhakathā* での説明について」, 『駒澤大学仏教学部論集』38, pp. 63-75.

本庄良文

- [1989] 「阿毘達磨仏説論と大乘仏説論 一法性、隠没経、密意一」, 『印度学仏教学研究』38(1), pp. 59-64.
- [1991] 「毘婆沙師の三蔵観と億耳アヴァダーナ」, 『佛教論叢』35, pp. 20-23.
- [1994c] 「『俱舍論』における餘部阿含の引用」, 『佛教論叢』38, pp. 51-56.
- [2010] 「毘婆沙師の仏説観」, 『インド論理学研究』1, pp. 173-193.
- [2011a] 「経の文言と宗義 一部派佛教から『選択集』へ」, 『日本佛教学会年報』76, pp. 109-125.
- [2011b] 「アビダルマ仏教と大乘仏教 一仏説論を中心に一」, 『シリーズ大乘仏教2 大乘仏教とは何か』, 春秋社, pp. 173-204.
- [2014] 『俱舍論註ウパーイカーの研究 訳註篇』全2巻, 大蔵出版.

前田惠學

- [1-8, 別1-2] 『前田惠學集』全8巻・別巻2, 山喜房佛書林, 2003-2007.
- [1966] 『原始佛教聖典の成立史研究』, 山喜房佛書林. (= [別1])

水野弘元

- [1-3] 『水野弘元著作選集』全3巻, 春秋社, 1996-1997.

三友健容

- [2007] 『アビダルマディーパの研究』, 平楽寺書店.

南清隆

- [1984] 「初期経典の一樣態 —『スッタニパータ』アッタカヴァッガを中心に—」, 『佛教大学大学院紀要』12, pp. 83-107.

村上真完・及川真介

- [1985-1989] 『仏のことば註 —パラマッタ・ジョーティカー—』全4巻, 春秋社.
- [1990] 『仏と聖典の伝承：仏のことば註 —パラマッタ・ジョーティカー研究—』, 春秋社.

森祖道

- [1984] 『パリー仏教註釈文献の研究』, 山喜房佛書林.
- [1992] 「ブッダゴーサ著作の問題点 —ピン論文をめぐる—」, 『印度学仏教学研究』41(1), pp. 1-11.
- [2009] 「〔書評〕馬場紀寿著『上座部仏教の思想形成 —ブッダからブッダゴーサへ—』(I)」, 『佛教研究』37, pp. 233-251.
- [2010a] 「〔書評〕馬場紀寿著『上座部仏教の思想形成 —ブッダからブッダゴーサへ—』(II)」, 『佛教研究』38, pp. 281-291.
- [2015] 『スリランカの大乗仏教 —文献・碑文・美術による解明—』, 大蔵出版.

八尾史

- [2013] 『根本説一切有部葉事』, 連合出版.

吉元信行

- [1980a] 「説一切有部の大乘批判 —Vaitulika—」, 『真宗教学研究』4, pp. 46-57.

- [1980b] 「説一切有部の大乘批判 —ayogaśūnyatāvādin—」, 『印度学仏教学研究』 29(1), pp. 261-265.
- [1981] 「説一切有部の大乘批判 —自性—」, 『印度学仏教学研究』 30(1), pp. 294-297.
- [1982a] 『アビダルマ思想』, 法蔵館.
- リス・デヴィス, T.W. (中村了昭 訳)
- [1984] 『仏教時代のインド』, 大東出版社.
- ルヌー, L. & フォリオザ, J. (山本智教 訳)
- [1979-1981] 『インド学大事典』 全3巻, 金花舎.
- 渡辺文麿
- [1979] 「クッダカニカーヤのオリジナル考」, 『印度学仏教学研究』 28(1), pp. 54-59.

本研究は科学研究費（15K16622）の助成による成果である。